

令和元年・2年度 幼児教育研究
様々な遊びの中で健やかに育つ子どもの育成をめざして

小学校へ伝えたい

豊かな環境の中で育つ
“幼児期の終わりまでに育ってほしい姿”
～0歳児から5歳児までの育ちを小学校へ～



令和3年1月
八尾市
八尾市教育委員会

はじめに

平成 29 年 3 月に告示された「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」において、“幼児期の終わりまでに育ってほしい姿”が示されました。この“幼児期の終わりまでに育ってほしい姿”は、就学前施設において乳幼児期にふさわしい遊びや生活を積み重ねることにより、「就学前施設の教育・保育において育みたい資質・能力」が育まれている子どもの具体的な姿で、特に 5 歳児後半に見られるような姿です。この“幼児期の終わりまでに育ってほしい姿”を、保育者と小学校の教師が子どもの姿を共有するツールとして活用しながら、就学前教育・保育と小学校教育の円滑な接続を図ることが求められています。

本市では、これまで、学校園間での交流活動や幼保小合同研修会などの機会に、具体的な子どもの姿を共有し、就学前教育・保育と小学校教育の円滑な接続をめざしてきました。しかし、子どもの成長を分かりやすく伝え、深く理解してもらうためには、5 歳児後半に見られる姿だけを伝えるのでは十分ではないと感じます。

本研究では、0 歳児から 5 歳児のそれぞれの時期から、乳幼児が発達していく方向を意識して、それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねてきました。そして、研究において集積した、生活や遊びの中で育まれた具体的な力についてのエピソードを“幼児期の終わりまでに育ってほしい姿”の視点で分類し、事例集としてまとめました。

この事例集が、就学前施設間で子どもの育ちを共有したり、0 歳児からの発達や学びの連続性の中で育まれた資質・能力を小学校へ伝えたりする時の、ツールの 1 つとして活用されることを願っています。

小学校へ伝えたい

目 次

豊かな環境の中で育つ “幼児期の終わりまでに育ってほしい姿” ～0歳児から5歳児の育ちを小学校へ～

- 健康な心と体・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 自立心・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
- 協同性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
- 道徳性・規範意識の芽生え・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
- 社会生活との関わり・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
- 思考力の芽生え・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
- 自然との関わり・生命尊重・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
- 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚・・・・・・・・ 43
- 言葉による伝え合い・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
- 豊かな感性と表現・・・・・・・・・・・・・・・・ 55



健康な心と体

幼保連携型認定こども園における生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。





離乳食が始まったころは、食べることよりもミルクを飲むことが好きで、離乳食を口に入れると眉間にしわを寄せながら食材を口の中で確かめていました。また、食べさせてもらおうと口を開けますが自分で食材を持って食べることは嫌がっていました。



手で掴んで食べられるように保育者が手を添えたり、友だちと一緒に食べるようにしたりすることで食べることへの意欲が出てきて、食材にも興味をもち自分で食べようとするようになってきました。



順調に離乳が進み、給食に移行することになりました。給食ではさらに色々な味を知ることができ、意欲的に食べられるようになってきました。

💡 学びのポイント

歯が生えたり、咀嚼力や嚥下力が発達したりする時期に合わせて離乳食を始めます。様々な食材に出会う中で味覚が発達し、食べる意欲がわきました。また、保育者に手を添えてもらったり、友だちの姿を見たりしながら手づかみで食べる方法を知り、自分で食べたいという意欲につながりました。

👍 環境構成の工夫

離乳食を提供する際には、調理室と話し合いながら、食材を掴みやすくまた噛みやすい硬さや大きさにしています。そして、「おいしいね」などと言葉をかけながら楽しく食べられるような雰囲気づくりをしています。また、この時期は、握る・つまむなどの動作を遊びの中にも取り入れ、遊びと生活の両面で身体の諸機能の発達を促すようにしています。



2階のアジトスペース（小さな入り口から入る秘密の空間）に初めて行ってみました。U字型ウレタンブロックを見つけた子どもたちは、さっそくよじ登ったり押したりしています。ユラユラ揺れることに気がつき、シーソーのように乗って落ちないようにつかまって、友だちと顔を見合わせて喜び声をあげて楽しんでいました。保育者がそばについて揺らしてみると、その横で保育者の真似をして揺らしてみる子どももいます。それぞれのやり方で楽しむ姿がありました。

そこで、保育室にU字型ウレタンブロックを持ち帰ることにしました。ダイナミックに遊ぶ中、AとBが思いっきり押すとブロックが反対向きになりました。それを見た子どもたちは、滑ったりくぐったりと今までとは違う遊び方を始めました。全身を使って遊び、大人気の遊具になりました。

運動参観では、広い遊戯室で、よりダイナミックに生き生きと身体を動かして、保護者と一緒に運動遊びを楽しみました。



学びのポイント

揺れる感覚を楽しむだけでなく、友だちの様子を見て自分も挑戦したり、すべり台やトンネルに見立てて新しい遊び方を見つけたりすることができました。また、繰り返し遊ぶことで、バランスを取ってよじ登ったり、落ちないようにつかまったり、しゃがんだりといった全身運動へ変化していきました。



環境構成の工夫

子どもたちが存分に遊べるように十分な時間を確保しました。ブロックの向きや置き方を変えながら、保育者も一緒に遊ぶことで、バリエーション豊かな動きを経験できるようにしました。また、運動参観にこの遊びを取り入れ、親子で運動遊びの楽しさを共有できるようにしました。

2歳児 みてー！食べた

令和2年7月～



給食の味付けになじめず、最初はお茶を飲むことが精一杯だったA。少しずつ給食やおやつを口にするようになってきたものの、今度は口の中に溜め込む姿が出てきました。

遊びの中で友だちとのかかわりが増えてくると、食事中に友だちが「Aちゃん飲んだなあ」「食べたなあ」と声をかけたり、拍手したりするようになりました。Aはとても嬉しかったようです。そんな経験を何度も重ねるうちに、苦手な物も食べようとするようになりました。

Aは、1口食べ終わると口を大きく開けて「からっぽー」と友だちに見せて回ります。周りの子どもたちも、友だちの口を覗いて「からっぽになった」「もうないなあ」と食べられたことを喜び合うようになりました。

Aは、友だちや保育者とつながりができたことで、安心して園生活を送るようになりました。活動量も増え、今ではおかわりまでするようになりました。

💡 学びのポイント

友だちや保育者に認められることで食べる意欲が湧く、友だちの刺激を受けて苦手な物にもチャレンジするようになりました。また、食べられたことが自信となり、さらに意欲的に、友だちと同じ量を食べたりおかわりをしたりするようになっていきます。友だちと一緒に食事を楽しむようになりました。

👍 環境構成の工夫

食べることを強要せず、無理のないように食事を進めていきました。また、楽しい雰囲気の中で、食べられたことを認め合う温かいかわりを心がけました。食事の時間以外にも、互いを認め合い、安心できる環境の中で、友だちとかわりをもっと過ごせるようにしました。



Aは、合同保育の日に5歳児と一緒に跳び箱を経験しました。後日、「この前、跳び箱跳べてん。今日もやりたい」とAが提案し、跳び箱チャレンジが始まりました。

初めて経験するB・Cは跳び箱の上に立って跳んで下りたり、横向きになって乗り越えたりと、自分なりに楽しんでいます。Aは1度目から跳ぶことができ、Dも繰り返すうちに跳べるようになりました。その姿を見てB「すごいなあ」 C「どうやったら跳べたの？」ときくと、A「足めっちゃパーするねん。これくらいパーするやんなあ?D」 D「うん。それとな、おててもパーするんやで」と、跳べた二人はコツを伝え合っていました。

それを聞いて、B・Cも足を開いて挑戦し始めました。



学びのポイント

年上の友だちに憧れ、跳び箱を跳びたいという意欲が高まりました。跳び方のコツを聞いて足をぐっと開いたり、手をしっかり開いてついたりなど、自分の体の動きをコントロールしようとしている姿が見られます。何回も繰り返す根気も身についてきています。



環境構成の工夫

跳び箱を跳ぶには、筋力・跳躍力などの発達とともに協応動作の獲得が必要です。3歳児では、跳び箱が跳べるようになることが目的ではないのですが、子どものやりたいという気持ちを叶えられるように環境を整えました。この時は、2段の跳び箱を用意しました。



ポックリができるようになったA。保育者が「遠くまで行けるようになったんだね。」と声をかけると「うん！お散歩行ってきまーす！」と園庭の周りをポックリで歩いていました。

次の日、保育者がポックリの近くにエス棒や小コーンを並べてコースをつくると、Aは慎重にエス棒をまたいで歩いていました。また、5歳児がコーンの間をS字に歩く姿に刺激を受け、挑戦し始めました。A「よっしゃー！！できた～！！」保育者「Aくん、できたね！！昨日より難しいのに5歳さんみたいに頑張ったね。」A「簡単やったで～！」と、満足そうに繰り返し遊んでいます。

その日の振り返りで、Aが「今日はポックリでぐにゃぐにゃ道行けてん。」と話をし、保育者がクラスのみんなに写真を見せると、Bが「僕もやりたい！！」と声をあげ、一緒に挑戦することになりました。

後日、自由に組み合わせて遊べるように、ポックリの近くにエス棒やコーン等を置いておくと、AとBが相談しながらコースをつくり、挑戦し始めました。保育者が「おもしろそうな道になったね。エス棒のところ狭そうだけど、いけるかな？」と声をかけると、「いけるで～。」「やってみよう！」と自分たちでつくった道を楽しんで歩いていました。「できた～！」「うん！できたなあ！！」と喜び合い、それ以降、毎日、遊び方を少しずつ変化させています。ポックリを下駄に履き替えて、さらに難しいことにも挑戦するようになってきました。

💡 学びのポイント

5歳児の姿に刺激を受け自分でも挑戦することで、遊びのおもしろさを感じるようになりました。また、自分たちでつくったコースに挑戦し、できたことが喜びや自信につながっていきました。エス棒やコーンを使ってコースづくりを工夫したり、様々な動きを遊びに取り入れたりする様子に周りの子どもが刺激を受け、一緒に体を動かして遊ぶ楽しさを味わうことができました。

👍 環境構成の工夫

子どもの「やってみよう」という気持ちを大切に、コースを変化させることができるようにエス棒やコーンを用意しました。また、振り返りの場でAの遊びを知らせたことで、興味をもった子どもたちが集まり自分たちでコースを考えて挑戦し始めました。できたことで達成感や満足感を味わうことができました。



進級当初、Aは自分がやりたい遊びを見つけることができにくく、誘いかけると「じゃあ、それでいいわ。」と誘われた遊びをしていました。子どもたちが、竹馬に興味をもち取りくみ始めた時、Aにも声をかけてみると初めはいつもと同じような反応でした。しかし、毎日取り組んでいるうちに、自ら積極的に竹馬に乗り、何度も繰り返して遊ぶようになりました。

2学期になると、Aは参観で見てもらおうと、園庭で遊んでいる時間は竹馬に挑戦し続けます。やがて、一段に乗ることができるようになりました。Aはすごく嬉しそうで、その日の振り返りの時間には一番に手を挙げ、「竹馬に乗れるようになって嬉しかった。」と笑顔で話をしました。

その後も竹馬に挑戦し続け、三段にも乗れるようになりました。次は「台なしで三段に乗る！」というのが、Aの新たな目標です。

💡 学びのポイント

諦めずに挑戦し続けることで、できなかったことや難しいと思っていたことができるようになり、自ら積極的に遊ぶ姿へと変わっていきました。また、振り返りの場では、子ども同士が頑張っている姿を認め合うことで、目標をもち意欲的に活動することにつながりました。

👍 環境構成の工夫

興味のある遊びを見つけることができるように、様々な遊びに誘いかけてきました。竹馬には繰り返し取り組んでおり、「乗れるようになりたい」という思いを感じたので、挑戦できる機会をたくさん作り、Aの頑張りを認めたり乗れる友だちの様子を一緒に見たりしながら、寄り添ってきました。できるようになったことを友だちに聞いてもらったり、認めてもらったりすることで、次への意欲へつながるようにしています。



自立心

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。





リングを見ると興味をもったようで、すぐに取りに行ったA。リングを頭から体に通し、ハンドルを持ったつもりになって遊びだしました。「いいなー。いってらっしゃーい」と声をかけると嬉しそうに笑って喜んでいます。

保育者がAの前でリングを回して見せると、不思議そうな顔をしてじーっと見ています。リングが倒れると指差して「アッ！」と言い、保育者の「もう1回しようか？」の言葉に頷きます。保育者がもう一度回すと、やはりリングが回る様子がおもしろいようで、ニコニコしながら見入っていました。

その後“自分もやってみたい”とリングを手に取り回そうとします。すぐに倒れてしまいますが“回したい”という思いから何度も挑戦していると、偶然に少し回りました。「ヤッタ！回ったね！」と声をかけると嬉しそうにニコリと笑い、遊び続けます。



学びのポイント

興味をもったことに対して保育者が何度もやって見せたことで、Aの「自分でもやってみたい」という思いにつながりました。また、偶然に回ったタイミングを逃さずに「ヤッタ！回ったね！」と言葉をかけてAの喜びに共感しました。自分でやってみたいという思いを大切に、様々な経験を重ねることが自立心につながっていきます。



環境構成の工夫

安心して遊べるように保育者が側で見守りながら、広々とした空間で伸び伸びと遊びが楽しめるようにしています。リングなど興味のあるものは十分な数を用意しました。保育者がモデルとなって遊びを提案しながら、自分もやってみたいという思いにつながるようにしています。次々に遊びを提案するのではなく、興味をもった遊びをじっくりと楽しめるように、見守りました。



子どもたちにダンゴムシを見せようと手の平に乗せて声をかけました。子どもたちは、「これはなんだろう」と、初めて見る物体を不思議そうに見つめていましたが、興味がわき触ってみようとするようになりました。

Aはいつも友だちのそばでダンゴムシ観察をしています。触ってみたいようですが、実際にはなかなか触ろうとしません。ある日、Aがスコップを持ってダンゴムシの観察にやってきました。保育者が「ここに入れてあげようね」と言うと、スコップを前に出してダンゴムシを受け取り、じっと見つめています。ダンゴムシが自分の手元までくると、他の保育者や友だちに嬉しそうに見せに行っていました。

数日後、ダンゴムシ探しをしながら、保育者の隣にきたA。保育者が「手を出してごらん」というとそっと手を出します。ダンゴムシを乗せると嬉しそうに微笑みました。



学びのポイント

初めは「これなんだろう」と観察していましたが、やがて、「怖い。けど見たい!」「触りたい!」とAの心が変化していきました。ダンゴムシの形や動きなどを十分に観察できたことや、スコップ越しではあっても「ダンゴムシに触れることができた!」という自信が、手の上に乗せるという次のステップに進むきっかけとなりました。



環境構成の工夫

Aの姿を見守りながら、心の動きやタイミングを捉えてそっとダンゴムシに乗せたことで、自分で触れることができました。無理なく、少しずつ親しむことができるようにしたことで、じっくりとかわり、興味をもつようになりました。子どもたちが身近な虫や植物に興味をもったり触れたりできるように、乳児園庭に花や野菜を植え、植物や虫との出会いの場をつくりました。子どもたちの豊かな心の育ちにつながったように感じています。



幼児が大きなタライに水を入れて砂場に流しているのを見て、興味をもったA。幼児がいなくなると、自分もやってみようと大きなタライを水道に持っていき、水を入れて運びます。

保育者が「お手伝いしようか？」と声をかけても、「Aちゃんがする！」と、自分でタライを持ち上げてみたり、引っ張ってみたりと試行錯誤をしていました。

水は20ℓ程入っていて大変重いので、Aから助けを求めてくるかと思いついて見守っていました。Aの「自分でしたい！」という気持ちは強く、時間はかかりましたが、自分一人でタライを運び砂場に水を流すことができました。

自分の思った通りにできたことに達成感を感じたようで、嬉しそうな表情をしていました。

💡 学びのポイント

幼児が大胆に砂場に水を流すのを見て、自分もやってみたいと思いました。引っ張ったり持ち上げたりと試行錯誤しながら、手伝ってもらわず最後まで一人でやり遂げたことで、達成感を味わうことができました。

👍 環境構成の工夫

日頃から幼児の遊びを見たり一緒に遊んだりする環境があります。子どもたちが好きな遊びを楽しめるように、自由に使えるタライなどを用意していました。幼児と同じようにしたいという子どもの気持ちを大切に、見守りながら援助することで、子どもが達成感や満足感を味わうことができるようにしています。



10月上旬から始めた当番活動!! 友だちの名前を呼んで元気調べをし、出欠を看護師に報告に行きます。看護師から子どもたちに向けたメッセージを聞き、クラスに帰って友だちに伝えるのが仕事です。

普段は大きな声で話すAですが、初めての当番活動では緊張で声が出ず、保育者の手をずっと握ったままでした。緊張からか何度も保育者の手を握り直し、落ち着かない様子です。

2回目の当番活動では、1回目よりも少し大きな声が出るようになりました。保育者と手をつながなくても大丈夫になったものの、落ち着かない様子でソワソワしています。

3回目の当番活動では、友だちの当番活動の様子を見たりAも何回か経験したことから、少し自信が出てきたようです。笑顔でみんなの前に立ち、大きな声で名前を呼び始めました。名前を呼ばれた友だちが元気に返事をしたので、Aも嬉しそうな顔をしていました。

その後は、保健室にも率先して行って看護師に休みの報告をし、看護師からのメッセージをしっかりと友だちに伝え、“できた”という表情で自分の席に戻るようになりました。

💡 学びのポイント

経験を重ねることで自信につながりました。また、友だちが元気に当番活動をする様子を見て、みんなの前で話すことが、緊張することから楽しいことになっていきました。自信をもって意欲的に取り組むようになりました。

👍 環境構成の工夫

Aの姿を見守りながら、頑張ろうとする気持ちを汲み取り楽しい雰囲気になるように声をかけました。緊張するけれど大切な役割であることも理解しており、当番活動を続けることで少しずつ気持ちに変化していきました。友だちや保育者の支えもあり、やり遂げることができました。

4歳児

怖い・・・でもやりたい・・・

令和2年10月20日～



友だちが雲梯の上部の梯子を渡っていく姿に刺激を受け、「やってみたい」と数人の子もたちが挑戦していました。いつも一緒に遊んでいる三人組の女兒たちも挑戦しますが、上まで登るものの怖くて進めず、「怖い。降りたい」と保育者に助けを求めて降りてきました。しばらくその場から離れ、数分後に再度挑戦しますが、やはり上まで登ると怖くて進めません。

その日の午後、再度挑戦するAとBは、少しずつ進み出し、「怖いけど、行けた」と喜び、達成感を味わっていました。Cは、挑戦しようとするもののやはり怖くて進めないでいます。

翌日、AとBが何度もチャレンジする中、Cも取り組みます。C「怖い・・・」保育者「降りる？どうする？」Cは泣きながら「降りたい」「でも怖い」と葛藤していますが、降りようとはしませんでした。

振り返りの時間に、Cが「怖いけど、渡りたいの」と自分の思いを伝えました。Cにとって何か踏み出せるきっかけになればと思い、保育者が「(みんなの前で) やってみる？」と声をかけると、Cは「やってみる」と挑戦します。友だちが応援してくれる中、それまでは、なかなか出なかった一歩が出て、進み出しました。最後までたどり着くと、クラスみんなが「やったやん」「行けた」と喜んでくれました。C自身も「ありがとう。みんながパワーくれたから最後まで行けた」と達成感を味わうことができました。

📢 学びのポイント

友だちの遊ぶ姿に刺激を受け、挑戦してみようとする気持ちが生まれました。しかし、恐怖心が強くなかなか一歩が出せません。気持ちが葛藤する中、友だちの応援が大きな支えとなり、諦めずにやり遂げることができました。クラスの友だちも一緒になって喜んでくれたことで達成感を味わい、自信につながっていききました。

👍 環境構成の工夫

葛藤を繰り返しながらも諦めずに取り組もうとする気持ちに寄り添い、Cのペースを見守りながら達成できるように援助しました。友だちとのかかわりが深まってきた時期であったので、友だちのことを認めたり励まし合ったりすることができる仲間づくりをめざし、振り返りの時間にCの思いを伝えることにしました。



興味をもった子どもたちがけん玉に挑戦し始めたので、けん玉検定日を設けることにしました。

けん玉の様々な技に難なく合格していくA。みんなの前で新技を披露しては、友だちに「すごいなあ！」と言ってもらい満足そうにしていました。ところが、Aは『やきゅう』という技に苦戦し、出来ないもどかしさから、しばらくけん玉に触れない日々が続きました。

一方でBは「難しいねん」と言いながらも、時間をかけて何度も練習し、『やきゅう』にも合格しました。振り返りでBが披露すると、Aは悔しそうな、でも自分もできるようになりたい、と葛藤しているような表情で見っていました。保育者は、Bのひたむきに練習していた姿やできなくても諦めずに何度も挑戦していた姿を子どもたちに伝えました。



Bの姿に刺激を受けたAが再びけん玉を手に取り、何度も心が折れそうになりながらも諦めずに挑戦します。ついにAも『やきゅう』に合格しました。Aは「最初できなくて悔しかったけど、諦めずに頑張っよかった」と話し、その後は、友だちにコツを伝えたり、できるようになったことを一緒に喜んだりするようになりました。



学びのポイント

何でもそつなくこなすAが壁にぶつかり、このまま諦めてしまうかと思われましたが、Bの姿に刺激を受け、再び挑戦しようとする気持ちが芽生えました。何度も心が折れそうになりながらも、諦めずにやり遂げたことで達成感を味わい、友だちの頑張りも認められるようになりました。



環境構成の工夫

けん玉の様々な技に挑戦できるように、検定表をつくったり、クラスで話し合っ検定日を設けたりし、自分で目標を決めて挑戦できるようにしました。また、友だちの頑張る姿を知らせたり、できるようになったことを披露する場を設けたりして、友だち同士で認め合える場を大切にしました。



協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。





保育者が色水の入ったペットボトルで友だちと遊んでいると、Aが近くに来ました。

“やってみたいのかな”と思い「一緒にジュース飲む？」と声をかけると、ニコッと笑顔を見せます。カップを渡すと飲む真似をして一緒に遊びだしました。“もう一回したい”という表情で保育者を見ていたので、ジュースを入れて飲むという遊びを何度か繰り返しました。

その後「先生も飲みたいな」と言いカップを持つと、Aも保育者と同じように「ジャー」と言いながら入れてくれました。

「おいしい、ありがとう」と言って飲む真似をしたり、“おいしい”の仕草をしたりすると嬉しそうな表情をし、“もう一杯どうぞ”というようにもう一度入れてくれました。

学びのポイント

特定の保育者との間に芽生えた愛情や信頼感が人とかかわりを広げる基盤となります。Aも、保育者とかかわりの中で、安心感をもって簡単な言葉や仕草で表現したり、やりとりを楽しんだりしています。また、保育者が遊びの場面に応じた言葉や動作などを示すことで、自分もやってみようと模倣しながら、一緒に楽しむことができました。

環境構成の工夫

一人ひとりが遊びを楽しめるように、色水の入ったペットボトルやカップをたくさん用意しました。また、ペットボトルは扱いやすい大きさのものを選びました。安心できる存在である保育者が「おいしいね」など共感することで、人とかかわって遊ぶ楽しさを味わえるようにしています。



AとBが一緒にいる姿をよく見かけようになりました。初めは、同じ場所で同じような遊びをそれぞれが楽しんでいるという様子でしたが、隣に居ることが多く、徐々に波長が合ってきたようです。

ある日、AとBが遊んでいるところにCがやって来て、Aの持っているおもちゃを「かえして〜」（貸して）と何度も大きな声で言い始めました。それを見たBが、“貸してあげたら“というような仕草をすると、AはCにおもちゃを貸しました。

Bがブロックを高く積んでいるのを見て、Aもやってみようと思い始めました。相手が行っている遊びに興味をもったり、自分もやってみようとしてみたり、お互いに刺激し合っている姿が見られるようになってきました。

戸外でも、Bが集めた石をトレイに入れて遊んでいると、Aも集めていた石を持って来て、一緒に眺めたり置いたりしながら遊んでいます。

💡 学びのポイント

そばに居ることで安心感をもつようになり、同じ空間で遊びを楽しむようになりました。言葉がなくてもお互いに仕草や表情で気持ちを伝えようとしたり、目と目を合わせてにっこり笑い合ったりと、やりとりをする姿が見られます。また、相手の遊ぶ姿に刺激をうけて、同じようにやってみようという意欲につながりました。

👍 環境構成の工夫

安心して遊ぶことができるように、まずは、保育者が寄り添ったりスキンシップを取ったりしながら、信頼関係を築いてきました。子ども同士がかかわっている様子を捉え、保育者が互いの気持ちを代弁したり、互いを意識できるような言葉をかけることを大切にしています。少しずつ、友だちと一緒に居ることや一緒に遊ぶことを楽しむようになってきました。



保育室に置いている人形を、着せ替えができる人形に変えました。今までの人形にはなかったスタイや服、下着を着ているため、たくさんの子どもが興味をもって世話をし遊び始めました。服や下着を脱がせた後、Aがパンツを、Bが服を着せようとしたが、初めての為なかなかうまく着せられません。

A「・・・」（黙々と履かせようとする）
B「これ（服を着せるのは）むずかしいわ」
初めは別々に着せていましたが、Bは服を着せることが難しかったため、Aを手伝い一緒にパンツを履かせ始めました。

B「これもってて」A「いいよ」二人で何とかパンツを履かせることができました。でもズボンに足を通すことは難しく、B「せんせい、やって」と助けを求めに来ます。足を通して渡すと再び二人で服を着せようと頑張り、スタイもつけることができ、とても満足そうでした。

A「みて！BとAで、着せてあげてん！」と、嬉しそうに保育者に見せにきました。その後、他の子どもたちが人形に服を着せる時は、お互いに「手伝って！」と声をかける姿が見られました。

💡 学びのポイント

仲のよい友だちと、難しくても“履かせてみたい”という気持ちをもって一緒に繰り返し挑戦していました。やりとりをしながら上手にパンツを履かせることができたことで、“服も着せたい”という気持ちにつながりました。同じ目的に向かって、言葉で伝え合いながらじっくり遊んでいました。

👍 環境構成の工夫

今まで使っていた人形を下着や衣服を着せ替えられる人形に変えたことで、より興味をもって遊んでいました。丁度よい数を用意することで、友だちと一緒に遊ぶ環境となりました。難しいところは手伝い子どもたちができそうなところは見守ることで、自分でできたという満足感を味わえるようにしました。



普段から段ボールを使って遊んでいた子どもたち。A「バスつくるねん」 Bと一緒にソフト積み木と椅子を並べ、周りに段ボールを立てます。A「誰かバス乗りませんか？」 B「乗ります！」見ていたC・D・保育者も遊びに加わりました。保育者「右に曲がります」「止まります」 Aが体を傾けそれに合わせて後ろの友だちも傾けます。「後ろに倒れます」の声で後ろに倒れると、歓声を上げて喜んでいました。

隣でおばけをもって遊んでいた子どもがおどかしにきました。B「おばけがきたぞ」 A「逃げろー！危ないからシートベルトつけます」と言い、Aがスズランテープを持ってきました。B「Aちゃんつけてや」 C「僕もつけて」 友だちの声を受けて、Aがスズランテープを腰に巻いていきました。全員シートベルトを着けると、A「みんなシートベルトしましたか？」

その声に他の子どもも答えながら、バスの遊びが再開され、繰り返し楽しんでいました。

次の日、CとDが昨日と同じように椅子を並べ、段ボールを周りに置いてあります。それを見に来たEに、C「バス乗るときはシートベルトつけるねんで」と伝え、スズランテープを3人の腰に巻きます。E「ププーのやついるよ(ハンドルのジェスチャーをする)」 C「運転するやつやんな」 C「これ使うな」と四角い段ボールを見つけ、ハンドルに見立てて運転手を交代しながら、バスごっこを楽しみました。



学びのポイント

自分の思いやアイデアを友だちに伝え、遊びを進めようとしていました。友だちと言葉を交わす中で、遊びに必要なものを思いつき、自分なりに考えて用意する姿が見られました。また、保育者の言葉に従ってみんなで動きを合わせることがとても楽しく、歓声を上げながら遊びも盛り上がっていきました。今までかかわりの薄かった子ども同士がかかわる機会となり、遊びが広がっていきました。



環境構成の工夫

段ボールやソフト積み木、スズランテープは子どもたちがいつでも取り出しやすい場所に用意をしています。また、友だちと一緒に安全に遊べるための広い空間を確保しました。保育者も一緒に遊び、楽しさを共感し、やりたい遊びを見つけられるようにしました。



ある日、積み木で遊んでいた子どもたちが「これって線路みたい」と積み木を線路に見立てて並べ始めました。周りの子どもたちも参加します。

数日後、長い線路ができてくると、絵本『せんろはつづく』の踏切の絵を指さし「これ足りひんのちゃう？」と、踏切づくりにとりかかりました。そして、次々と「駅いるやん」「乗れる電車ほしい」と必要なものをつくり始めました。

「駅」づくりでは、子どもたち同士で声をかけ合い「ここ押さえるわ」「テープ持ってきて」などと、協力する様子が見られました。作った「駅」や「踏切」などは、みんなで作った「みんなのもの」として、共通の遊び場となりました。

完成間近なある日、振り返りの時間に、「積み木の線路ではすぐにバラバラになってしまう」と困っていることを伝えた子どもがいました。「線路をテープで貼ったらいいのでは…」という意見が出たので、テープを貼れる段ボールを用意すると、遊びの中で共有していたイメージをもとにすぐに完成させました。遊びは1ヶ月程度続き、時にはお店ごっこと合体するなど変化しながら、クラスの子もみんな楽しんでいました。



学びのポイント

共通のイメージをもったりルールを守ったりしながら、製作や遊びを楽しんでいました。また人手が足りない時には、周りの子どもに声をかけたり自ら手伝いにいたりするなど、複数人が協力していました。課題が見つかるクラスで話し合い、意見を出し合って解決策を考えるようにもなっていました。



環境構成の工夫

電車が好きな子どもが多く、電車の絵本や図鑑を保育室にたくさん置いていました。遊びが始まると必要な素材を十分に用意し自由に使える場を作ったり、広い空間を確保していつでも続きができるようにしたりしました。子どもから話を聞いたり絵本を見たり、時には言葉の橋渡しや質問を交えながら話し合うことで、ごっこ遊びのイメージがより明瞭になり、線路や踏切などを一緒につくっていききました。



折り紙や、テープ類を使ってアクセサリーブづくりが始まりました。つくったものを身に着け、キャラクターやアイドルになりきってごっこ遊びを楽しんでいます。

振り返りの時間。A「ショーしたかったけど、できなかった…」「また今度ショーをしたい」 B「私も一緒にしたい」 A「うん一緒にしよう」 その日の夕方、ベランダや部屋にステージをつくり、ショーごっこが始まりました。

C・D・E「ぼくも忍者のショーしたい！」
A・B・F・G・H「私もアイドルのショーするねん！」 話に折り合いがつかず、トラブルになりました。 保育者「どっちのショーも見たいな…どうしようか…」 C「交代でしょう！」 B「そうしよう！」 A・D・E・F・G・H「いいよ」 B「あ！私をお客さん呼んでくる」 C「わかった。準備しとくな！」 椅子を並べたりカセットデッキを用意したり、自然に役割を分担してショーの準備が進んでいきます。

B「呼んできたよ～。先に忍者のショーやっていいよ」 C・D・E「ありがとう！」 ショーの見合いごっこが始まると、「かっこいい！」「めっちゃかわいい！」と歓声があがりました。 J「写真撮るよ～こっちむいて～カシャ！」「かわいいのん撮れたよ」 F「わたしも撮って」 J「いいよ。カシャ」 とカメラマンも現れました。

アイドルショーでは、F「ここはなべなべしよ」 A「じゃあ最初は2人ずつして、その次にみんなでするのはどう？」 B「そうしよう」 F「最後のポーズはこうしよう」 G「えー私はこうしたい」 F「じゃあポーズは好きなものにしよう！」 G「うん！」と、友だち同士でポーズや振りを決めていました。

B「今日はきてくれてありがとう！私は〇〇です！」と自己紹介したり、握手会をしたりして、アイドルと客が一緒になって楽しんでいました。



学びのポイント

友だちがつくったものに興味をもち、つくり方を聞いて一緒につくったり、できたものを身につけたりして遊ぶうちに、アイデアを出し合い振りやポーズを決めてショーごっこを楽しむようになりました。さらに、カメラマンや応援団が場を盛り上げたことによって、アイドル役の子もたちが自信をもって表現することができました。遊びの中で友だちの異なる思いや考えに気づき、受けとめたり共有したりする姿も見られました。



環境構成の工夫

アイドルの衣装に合った素材や色を事前に用意したり、イメージに合わせて一緒に材料を探しに行ったりしました。また、ショーができるように十分なスペースを確保しました。保育者は子どもたちが自分たちで考えられるような言葉かけをするように心がけました。



道徳性・規範意識の芽生え

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。





園での生活に慣れ保育者との信頼関係ができ、A・Bともに安心して膝上で離乳食を食べています。

離乳食が順調に進み座位が安定してきたので、初めて椅子に座り、保育者と対面して食べることにしました。「すごいね。椅子に座ってるよ。うれしいね～」と声をかけると、Aは笑顔いっぱい、机上をなでるように触ったり両手を上げ下げしバンバンと机をたたいたりしながら、嬉しい気持ちを表現しています。

Aの姿に興味を示した隣のBも同じように笑いながら「あ～」と声を出し、机をたたき始めました。Aはしばし手を止めてBの様子を見えています。

「Bちゃんもうれしいね～」と保育者が声をかけると、A・Bともに「あ～あ～」と声を出して机をたたき、前に座っている保育者に見守られながら楽しげに笑っています。

💡 学びのポイント

信頼する保育者が子どもたちの前で、表情や穏やかな声で気持ちを言葉にしながらか共感しています。楽しい雰囲気とともに感じながら、人とかかわる楽しさや一緒に過ごす喜び、安心感を感じています。このような経験が人とかかわる力の基礎となり、一緒に心地よく過ごそうとすることにつながります。

👍 環境構成の工夫

子どもの気持ちに丁寧に寄り添い、安心して自分の気持ちを表現できるように信頼関係を築いています。Aの姿を見て楽しむBを、他児へ関心が芽生え始めた姿として捉え、同じ空間で過ごす心地よさを共有することを大切にしました。



保育室で一人ひとりが好きな遊びを楽しんでいました。

しかしAは自分のしたいことが上手くいかず泣いてしまいました。保育者がAのそばに行こうとすると、Bが泣いているAに気がついて側に行き、困った様子で顔を覗き込んでいます。

それを見たCもAのそばに行き「A エンエンしているよ」と保育者に知らせにきました。保育者がその言葉を受けとめ「A 悲しいみたいだね」と伝えると、BはAの頭を撫で始めました。それを見たCも同じように頭を撫でていました。

しかしAは泣き止むことができずにいました。B・Cはその場を離れていきました。しばらく経つとCがまたAのそばに戻ってきて、「どうぞ」と玩具を差し出しました。

玩具を貸してもらったことが嬉しかったようで、Aは泣き止んでその玩具で遊び始めました。

💡 学びのポイント

友だちに興味・関心をもつようになり、周りの様子をよく見えています。自分が悲しい時にしてもらった心地よかった経験を思い出して、「頭を撫でてみよう」という気持ちになったようです。泣いていたAは友だちの優しさを感じ、泣き止むことができたのでしょう。このような経験を積み重ねていくことが、友だちの思いに共感したり相手の立場に立ったりすることにつながります。

👍 環境構成の工夫

子どもの内面を読みとり情緒の安定を図りながら、どんな時も丁寧にかかわり思いを受けとめ、寄り添うことを大切にしています。子ども同士のかかわりを見守りながら、友だちの気持ちを言葉や身振り、表情で分かりやすく伝えるようしています。

2歳児 せんろかいてー!!

令和2年11月～



過ごしやすい気候になり、園庭ではコンビカーや三輪車に乗る姿が増えてきました。

ある日、保育者が地面に線路を描くと数人の子どもが興味をもち、その上を何周も走って楽しんでいました。たくさんの子が集まり混雑してきたので、保育者が踏切役を一緒に遊びながら交通整理をしました。すると、保育者を真似て踏切役をする子どもも出てきて、遊びの面白さが増したようでした。

次の日、A「せんろかいてー!!」と保育者に伝え、前日の遊びが再開されます。遊んでいる様子を見ながら、巧技台で坂道を作ったり、鉄棒のトンネルをつなげたりしてみると嬉しそうにくぐり始め、何度も繰り返し遊ぶようになりました。

楽しくなってくると何度も繰り返し遊

そのうちに、進む方向を考えたり順番を守って並んだりするようになり、クラスみんなでルールを守って楽しく遊ぶことができました。

💡 学びのポイント

遊びが“おもしろい”からこそ“もっと遊びたい”という気持ちが生まれ、みんなで楽しく遊ぶために、スピードの調整をしたり順番を守ったりするようになりました。遊びを通して、心地よく遊んだりより遊びを楽しんだりするためには、きまりを守ることが大切だと感じているようです。

👍 環境構成の工夫

子どもたちの興味を見取りながら遊びの場を再構成したことで、クラス全体で繰り返し楽しむようになりました。遊ぶ人数によって場を広げ、互いに心地よく遊べるように声をかけたことで、順番を守ったり周りの友だちの様子を見て遊び方を理解したりして参加する姿につながりました。



Aが水を入れた製氷皿の中に、スーパーボールやキンギョの玩具などを1つずつ慎重に入れていました。

振り返りの時間に話を聞いてみると、A「これ入れたらな、色が変わるねん」子どもたち「ほんまや」「変わっている」保育者「Aちゃんすごい発見やね」A「氷になったら、みんなにもあげるよ」保育者「えー、みんなにもくれるんだって」A「だって、あげたらみんな喜ぶもん」

次の朝、Aは登園するとすぐに冷凍庫にかけより、綺麗に固まっている氷を持って保育室へ行きました。Aは誰もいないロッカーの隅で、氷になった製氷皿を抱え込んだまま、じっと眺めていましたが、しばらくして立ち上がり、みんながいるテラスへ向かいました。

製氷皿から氷を取り出すと一斉に友だちの手が伸びてきて、Aが作った大事な氷を取っていってしまいました。Aは顔をしかめながら、「いっこずつやで」と声を発しました。その声を聞いた周りの子どもたちはハッとした顔で、多く取った氷をAに返しました。

💡 学びのポイント

イメージ通りに綺麗にできあがった製氷皿を持ちながら、保育室のロッカーの隅で「友だちにあげたい（友だちは喜び）」「綺麗にできたからあげたくない」と一人葛藤している様子が見られました。そして、意を決して友だちにあげると決めたのに、氷をたくさん取られてしまい思わず声を荒げました。そんなAの姿を見て、大切に作った物だと知っている周りの友だちは、すぐにAの気持ちに気づくことができました。

👍 環境構成の工夫

やりたいことを実現し翌日にも遊びの続きができる環境を大切にしています。また、振り返りの時間には、遊びの中での気づいたことや自分の思いを伝え合う経験を積み重ねてきました。ここでは、Aの友だちに喜んでほしいという気持ちが子どもたちにも届いていたため、氷をたくさん取った自分の行動を振り返って“悪いことをした”と思い、氷を返そうという気持ちが生まれました。



ウレタンの樋を見つけた A が滑り台をつくって遊んでいました。それを見ていた B が近くにあったペットボトルのふたを転がし、B「うわー転がった!!」と大喜びしています。近くで遊んでいた友だちも加わり、ガチャガチャの容器やテープの芯などを転がし始めました。A「やめて!! やらんといて」 A は大きな声で怒っています。保育者「どうして怒っているの?」と A の気持ちを受けとめてから、順番に遊べるように援助しました。

次の日、A・B が一緒に、ガチャガチャの容器を転がして遊んでいます。すると B が樋をつなぎ始め、どんどん長くなっていきました。その姿を見て A「勝手にせんといて!」とつながっていた樋を壊しています。 B「何で壊すん!」とケンカになってしまいました。保育者は A・B が納得できるように、互いの思いを言葉で伝えられる時間をつくりました。話し合いを通して A は B の考えを理解し、受け入れ、長い樋つなぎができました。そしてガチャガチャの容器が最後まで到達するまで、何度も繰り返し転がして一緒に遊びました。

ある日、樋が倒れないように支える A、転がってきたガチャガチャの容器を受けとめ C に渡す B、そして転がる様子を見ている子どもたちがいました。A「さっきから、C ばかり転がしてるやん。ずっとこれ持ってるねんで。僕だってやりたい」 C「待って!あと少し」 保育者はその様子を見守ることにしました。 A「じゃー順番にしよう。Bくん、Dくん、、、の順番な」 みんな「いいよ」 それからは自分たちで考えながら、樋を使って転がすコースを組み立てて楽しんでいます。

🔦 学びのポイント

A は自分だけの特別な滑り台遊びに B がかかわってきたことで思いが通らなくなり、「やめて」と自分の意思を伝えました。保育者の援助もあり、周りの友だちの思いを受け入れて、一旦は遊びが展開していきましたが、B とのかかわりの中で樋を壊してしまいます。A・B 双方が思いを伝え合うことで、互いに友だちの考えを理解し一緒に遊びたいという気持ちが芽生えました。言葉で伝え合い、時には自分の気持ちに折り合いをつけながら、友だちと楽しく遊ぶ方法を模索していきます。

👍 環境構成の工夫

遊びに必要な物を自分たちで出し入れできるように、環境を整えています。つなぎ合わせながら遊べるウレタンの樋を用意し、遊びの中で必要になる物を予測して色々な素材や材料を準備しました。友だちとかかわりながら遊び方を考える様子を見守り、互いに納得ができるまで思いを伝え合うことができるように話し合う場をもちました。



梅雨明けし、急に暑くなりだしたある日…。

保育者「暑くなりすぎて、お外では遊べないね」 A「そんなに暑くないよ。きっと遊べるよ」（外で遊びたいという気持ちが伝わってきます。） 保育者「どうかな？お外の熱中計見てきてくれる？」 A「OK！赤になってたら我慢やな～」 早速友だちと一緒に確かめに行き…。保育室に戻ってくるなり、

A「今日は、残念の日やわ（お外は出られない）」 保育者「そっか。ありがとう」 A「下の熱中計だけじゃなくてお部屋の前にもあった方が分かりやすいからつくるわ！」 アイデアが閃くと、廃材コーナーへ一直線！じっくりと材料を選ぶと早速作り始めました。

A「できた！ストローで温度を指すねん。ちゃんと動くようにつけたんやで」 保育者「すごい！熱中計があればバッチリやね」 A「しかも、温度のところは色を塗ったから誰が見ても分かるねん」そして、保育者が「温度をどうやって合わせるのかな？」とたずねようとした途端、Aからひとこと。A「毎日、下の熱中計をぼくが見に行き行って合わせておくから、先生は何もしなくても大丈夫やで。任せといてな」と頼もしい言葉が返ってきました。



学びのポイント

厳しい暑さのため戸外で遊ぶ時間がどうしても制限される中、Aは外で遊びたい気持ちを切り替え、みんなが便利のように保育室前に熱中計をつくる遊びを始めました。熱中計が完成すると、みんなが見やすいように廊下に掲示したり温度を示したりしながら自分の役割を楽しみ、保育者や友だちから頼られることを心地よく感じているようでした。



環境構成の工夫

目につく場所に熱中計を掲示し、子どもたち自身で気温の変化に気づき、安全な生活の仕方について考えられるようにしています。日々、熱中計を確認しながら生活をする状況が続いていたため、2階の保育室前にも熱中計がある方が便利と考えたことが、つくりたいと思った時に時間や場が確保されており様々な素材を自由に使えることにより、実現しました。主体的に行動し、人の役に立つ経験となりました。



社会生活との関わり

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼保連携型認定こども園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。





保護者と離れる時に、気持ちの切り替えができるようにタッチをしたことがきっかけとなり、いつしか保育者ともタッチをするようになりました。やがて、友だち同士でも「タッチー」と言って手を合わす姿が見られるようになってきました。

AとBは登園時間が同じで、いつも「おはよう」の挨拶の代わりに“タッチ”をしています。しかし、Aはまだ“タッチ”の意味が分からない様子で、保育者に手をもってもらい合わせるだけでした。

ある朝、いつものように保育者がAに「タッチー」と言うと、Aは自分から手を上げました。Aが手を上げていることに気づいたBが、Aの手に自分の手を合わせました。



学びのポイント

保育者やBとのかかわりの中で同じことを繰り返していくうちに、Aの中で“タッチ”という“言葉”と“行動”がつながっていきました。「タッチ」と言うと手を上げ、保育者や友だちを待っています。友だちへの興味の芽生えは、社会とつながる第一歩です。



環境構成の工夫

保育者に見守られている安心感を基盤に、周りの友だちに親しみをもってかかわれるようにしました。人とかかわり方の一つとして「タッチ」を取り入れ、人とかかわる心地よさを感じられるようにしています。



AとBは、好きな遊びが同じこともあり、かかわって遊ぶことが増えています。

ある日、AはBと一緒に遊びたくて、「手つないで、お散歩行こう」と手を握りました。Bは散歩に行く気分ではなかったようで、なんとか手を放そうとしていました。それでもAが「Bちゃん！行くよ！手つないで！！」と引っ張るので、保育者が「Bちゃん、嫌な時は嫌って言っていいんだよ」と声をかけました。Bは、「嫌！！」と手を振りほどき、Aから少し離れた所へ移動しました。残されたAは、「えーん！！」と大きな声で泣き出し、保育者が「Bちゃんは、お散歩行きたくないんだって」と代弁すると、「Aは行きたいのー」と主張していました。

Bと保育者が、近くにいた子どもたちと他の遊びをし始めると、Aは泣きやみ、少しの間Bの遊ぶ様子を眺めていました。そして、気持ちが静まると、そーっとカバンの中のお弁当箱を出し、中のタマネギをBの前に、スイカを保育者の前に置きました。

Aは保育者と目が合うと、「食べて！おいしいよ」と促しました。「ありがとう。Bちゃん、Aちゃんがタマネギくれたよ」と保育者が橋渡しすると、Aは「Bちゃん、一緒に食べよう」と誘いかけ、Bは「うん！！」と受け入れて、2人で遊び始めました。

💡 学びのポイント

自分がしたいことは友だちもしたいと思いBを誘っていましたが、Bに「嫌！！」と言われたことが受けとめられず、葛藤する経験となりました。それでもBと遊びたいAは、自分なりに気持ちを切り替えて遊びに誘いかけました。こうして友だちや保育者とかかわる中で、相手の色々な思いに触れ、受けとめたり自分の思いを主張したりする経験を積み重ねながら、人とのかかわり方や相手の気持ちに気づいていきます。

👍 環境構成の工夫

友だちの遊びに関心をもち始めたので、同じものを複数用意して、模倣して遊ぶことのできる環境を整えています。遊びの中では、互いの思いが合わずもめごとになることもありますが、一人ひとりの思いを受けとめながら仲介したり、時には、気持ちが落ち着くまで見守ったりすることを大切にしています。



友だちと一緒にままごとコーナーで赤ちゃんにミルクをあげたり、抱っこ紐を使って抱っこしたりとお世話を楽しんでいる子どもたち。

ある日、Aは「お風呂入る」「シャワー！」と言って、ままごとコーナーの冷蔵庫の中にあつた箱を湯舟に見立てて赤ちゃんを浸けたり、身体を洗ってあげる真似をしたりして遊び始めました。

後日、Aが再び赤ちゃんをお風呂に入れて遊んでいると、それを見ていたBも同じように真似をして遊び始めました。Aは、ままごとキッチンに置いてある塩コショウ入れの容器を持ってきて、「せっけん！」とポンプを押す真似をし、容器を石鹸に見立てて遊んでいます。「きもちいいね～」とAは赤ちゃんに優しく話しかけていたので、保育者も「赤ちゃん、きもちよさそうやね」と共感すると、Aは嬉しそうにしています。



学びのポイント

周りの大人との愛着関係を基盤に、自らの生活経験を遊びに取り入れ、人形の赤ちゃんに対して優しく丁寧にかかわりながら見立て遊びを楽しんでいます。また、友だちの遊ぶ姿を見て、“楽しそう” “やってみたい” と感じ、真似て楽しんでいます。



環境構成の工夫

ままごとコーナーに家庭的な空間をつくることで、落ち着いた雰囲気の中、ゆったりと遊びを楽しむことができました。子どもの遊びや友だちとのやりとりに保育者が共感したり、時には見守ったりすることで、お風呂ごっこにつながっていきました。



4・5歳児がしていた石鹸遊びを見て「あわあわしたい!」と言い出し、「じゃあやってみよう!」と泡遊びが始まりました。

「あれ?泡立てへんな〜、つるつるするな」とうまくいかなかったので、保育者が石鹸を小さくカットして渡しました。小さくしたことで泡立ちがよくなり、きめ細かな泡ができ「泡風呂みたい〜!」「気持ちいいね」と泡の感触を楽しんでいました。

ままごとで使っていたハンカチやスカートを洗ってみようかと提案すると、Aは泡でごしごし洗った後、きれいな水でまた洗ってぎゅーっと絞る動作までし始めました。「乾かさなあかな〜」「私のママこうやって干してるねん」「パンパンってするねんで」と言いながら干し、陽が当たるように並べていました。

それを見ていたBが雑巾掛けから洗濯ばさみを取ってきて、一つひとつ丁寧に留め「こうしたら飛ばへんねんで」と教えてくれました。



学びのポイント

4・5歳児をまねた遊びで、石鹸を削ったりネットを使ったりしながらどのようにしたら泡立ちやすくなるかを考えていました。洗濯ごっこでは、泡で洗う・水で洗う・絞るなど、生活の中で知っていることを遊びに取り入れ、陽が当たって乾きやすいように工夫しながら遊びました。



環境構成の工夫

石鹸遊びを存分に楽しめるように石鹸を多めに用意し、タライやハンカチなども準備しました。子どもが試したいと思えるようにきれいな水や干し場をつくり、見聞きしたことを再現できるようにしておくことで遊びが広がりました。「どうなるかな?」と考えながら遊びを楽しんでいました。



保育室から出ようとしていたAと、保育室に入ろうとしていたBが出会い頭にぶつかってしまいました。以前から『廊下や保育室などは歩こうね』と伝えていましたが、今後、安全に過ごすにはどうすればよいのか、みんなで考える機会をもちました。

「走ったらあかん」「歩いたらいい」「飛び出せへんようにする」など子どもたちから意見がたくさん出てきました。Cが「“とまれ”のマーク作ろう！」と言い、画用紙でとまれマークをつくりました。しばらくして、C「見てない子がおる。」保育者「下だから見えにくいのかな？」D「ほんじゃあ、踏切みたいにしたらいいねん。」と、長い筒を材料につくり出しました。しかし、筒をドアにつけるだけでは通ることができません。悪戦苦闘する友だちの姿を見て周りの友だちも、E「ここに何か置いたらいいんちゃう？」D「じゃあ開けたり、閉めたりするのは？」と、保育室の扉に小さなドアをつけることになりました。

ドアには『あるこうね』の文字を入れ、出入りする時には開け閉めをします。開けっ放しになっていると「ちゃんと閉めてなあ」と閉めに行く子どもの姿もありました。

まだまだ走ってしまう姿もありますが、子ども同士で「歩こうな」「危ないで」と声をかけ合う姿が見られるようになっていきます。



学びのポイント

安全に遊ぶためにはどうすればよいかを、自分たちで考える機会となりました。身近な生活の中で接している標識の意味や必要性などに気づき、形や色などを友だちと考えながらつくり、園での生活にとり入れる姿がありました。



環境構成の工夫

生活の中で困ったことについて、みんなで話し合い考える機会をつくりました。また、うまくいかない経験を積み重ねながら、どうすればよいか考えたり色々なことを試したりする時間を十分に与えました。子ども自身で扱いやすい道具や用具を準備したり、必要な材料を自ら探したりできるように環境を整え、自分たちの生活を自分たちでつくる経験となりました。



4・5歳児の保育室の間にある倉庫を子どもたちが自由に選んで遊べる素材コーナーにしました。

倉庫の変化に気づいたAは、「めっちゃいっぱいいつくる道具とか材料あるやん！100円ショップみたいやな」「100円ショップって粘土とか折り紙とかいっぱい売ってるねん」「じゃあ、ここは100円ショップやな。看板とかレジとかあった方が買い物できるで」と、レジやカゴなど、必要なものを準備し始めました。

Bは、「今は、スーパーでお客さん同士が近づかないように、マークが地面（床）に貼ってあるんやで」と言って、ビニールテープで床に矢印を貼りつけています。

Cは、「レジのところには、ビニールが貼られていてお客さんを守ってるねん」と透明フィルムを貼り付けていました。

BとCは互いのアイデアを伝え合い、「お客さんも安心して買い物できるな」と得意げな表情を浮かべ、「なんでもある100円ショップですよ」と呼び込んでいました。お客さんも床のマークに沿って間隔をあけてレジに並びます。

💡 学びのポイント

床のマークや透明フィルムなどをお店やさんごっこに取り入れる姿は、コロナ禍の新しい生活様式を理解している表れです。子ども自身が社会をどのように見て何を感じているのかが、お店やさんごっこの遊びを通して理解できます。また、B・Cのアイデアが他の子どもたちのイメージとも合致していたことから、100円ショップの遊びが継続し発展していきました。

👍 環境構成の工夫

4・5歳児が共用できる素材コーナーにしたことで、クラス間を行き来したり異年齢がかかわったりするきっかけになりました。自由に使える材料や道具・場所があり、アイデアやイメージがすぐに実現できるようになったことで、遊びが発展していきました。保育者も遊びに入りながら一緒に素材コーナーを整理し、安全に遊べるようにしました。



思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。





1学期、子どもたちは、牛乳パックを布でくるんだものを積んで倒すことを繰り返し楽しんでいました。2学期になり、歩行ができるようになったことで探索活動が増していきました。そこで、積む・倒すという遊びに加えて、自分で見つけたもので遊ぶという経験をしてほしいと思い、牛乳パックを複数つなげて布でくるんだ大きめの積み木を玩具棚に置き、子どもたちが気づくまで待ってみました。

約2週間後、Aが棚の積み木に気づき、取り出して黙々と積み始めました。前より大きいので、重ね方によってはグラグラし、崩れそうになります。手で支えたり、そっと置いてバランスを整えてみたりしながら積んでいました。やっと6個積み重ねられるとAは指をさしながら保育者に向かって笑顔を見せました。保育者は「わあ！積めたね！」「すごいね！」と喜び、Aの気持ちに共感しました。

数週間後、繰り返し積んで楽しんでいたAは、積み木の向きをそろえるようになりました。



学びのポイント

自分で見つけたおもちゃを“高く積みたいな”“どうしたら積めるかな”と手で支えたり、少し位置をずらしてバランスをとったりしながら、積み上げて遊んでいます。何度も繰り返す中で、『揃える』ほうが安定することに気づいたようです。



環境構成の工夫

子どもが両手で扱うことのできる大きさの積み木を準備して、さりげなく玩具棚へ置いておきました。見つけた子どもは“こんなのがあった”“触ってみたい”と意欲的に遊び始めました。夢中になっている時には声をかけずに見守り、表情や仕草で伝えようとした時にはしっかり受けとめ応えるようにしています。



Aは、大きなタライの水をスコップですくい、黙々とバケツに入れ始めました。しばらくして、バケツに水がたまっていくことに気がついたA。“あっ、お水が増えていく！”という表情で水をすくい続けています。



やがて、バケツに水がたっぷりたまってきました。“もうちょっとで、いっぱいになる！”と、さらにスコップで水を入れ続けます。



バケツいっぱい水がたまりました。“そうだ！水車にこのお水をかけてみよう”と、上から水をドバーッと流しました。水車がクルクルと回り、嬉しそうに眺めていました。



学びのポイント

スコップを使えば、タライからバケツに水を移し替えることができると気づきました。集中して黙々と取り組んでいます。水車に水をかけると回ることは、以前の経験から知っていました。何度も繰り返し遊びながら、水の性質に気づいていきます。



環境構成の工夫

水の気持ちよさや性質を感じられように、様々な種類の玩具を手の届く所に用意しておきました。集中してじっくり遊べるように見守りながら、“できた！”という喜びや“水が溜まった”という発見に共感し、タイミングを逃さずに声をかけました。



Aはペットボトルに水を入れたいと思っています。そこで保育者は「これ、砂場で使ったじょうごみたいだね」と、下半分を切ったペットボトルがあることをさりげなく知らせました。Aはそのじょうご型のペットボトルを保育者から貸してもらうことにしました。

じょうご型のペットボトルの口を自分のペットボトルの口に合わせ、保育者に「水を入れて」と差し出しました。水を入れていると、合わせた口の部分が少しずつずれて水が漏れてしまいます。Aは、ペットボトルを合わせる力加減や合わせた口の部分の位置を調節するなど試行錯誤しながら、水をペットボトルいっぱいに入れることができました。

「おお～」とたっぷり水の入ったペットボトルを持ち上げ、満足そうな顔をしていました。



学びのポイント

じょうごを使って砂を入れて遊んだことを思い出し、ペットボトルの口にあてて水を入れました。砂とは違う水の動きを感じながら、どのようにすると水がうまく入るかを考えながら、水をペットボトルいっぱいに入れることができました。



環境構成の工夫

様々な水遊びの玩具を用意し、広いスペースを確保して落ち着いて遊べるようにしました。Aのやりたいことを理解したうえで、保育者がすぐに手伝うのではなく、見守ったりさりげなく玩具を見せながらAが気づくような言葉をかけたりし、自分の力で達成できるように援助しました。



砂場で遊んでいるA。片手にアルミのふるいを持ち、もう片方にはプラスチックのふるいを持っています。保育者「Aちゃん、何してるの？」 A「どっちが、サラサラになるかなーと思って、サラ砂つくってるねん。」保育者「すごいねー。どっちがサラサラになりそう？」 できたサラ砂を保育者に見せながら、

A「こっちは（プラスチック）、小さい石が入るねん。だから、こっちの方が（アルミ）サラサラやねん。」 保育者「すごいなー。Aちゃんの発見やね！」

その後、サラ砂をつくる時には、よりサラサラになるようにアルミのふるいを使ってついている姿が多く見られました。



学びのポイント

普段から、4・5歳児のサラ砂づくりを見ていたA。いつもはプラスチックのふるいを使っていましたが、4・5歳児と同じアルミのふるいを使ってみることで、違いを体験を通して学びました。さらに、どうしてサラサラになるかということをも自分なりに言葉で表現して伝えています。Aの発見を保育者が認めたことで、満足感を味わいその後も継続して遊ぶ様子が見られました。



環境構成の工夫

遊びに必要な用具は、自分で選んで取れるように環境を整えています。ふるいもプラスチックのものとアルミのものを同じカゴに入れておき、子どもたちが必要に応じて選択できるようにしました。異年齢で園庭を使って遊ぶことにより、自分より上手にサラ砂をつくる年長児との遊び方の違いに気づき、目的に合った用具を選択しなおすことができました。



ある日、Aが保育者に「積み木を高くできない！できないからやって」と言いに来たため、保育者は「友だちはなんで高く積めるんやろうね？」と問いかけてみました。Aは「ちょっと見てくるわ！」と高く積んでいる友だちのところへ行き、観察をはじめましたが、その日は諦めてしまいました。

後日、Aの積み木の積み方が変わっていたため、話を聞いてみることにしました。すると、「Bちゃんがこうやって（四角の形）置いてた！」「積み木はそっと置いたらいいねん」「まっすぐ積むねん！」と答えました。この日は四角になるように規則的に積んでいます。また、そっと積むために、片手ではなく両手を使って積んでいました。

この日以降、Aは自分で納得できる高さまで積み木を積むことができるようになり、崩れてしまっても「あー崩れたー！もう一回！」と、満足げな様子で楽しむことが増えていきました。



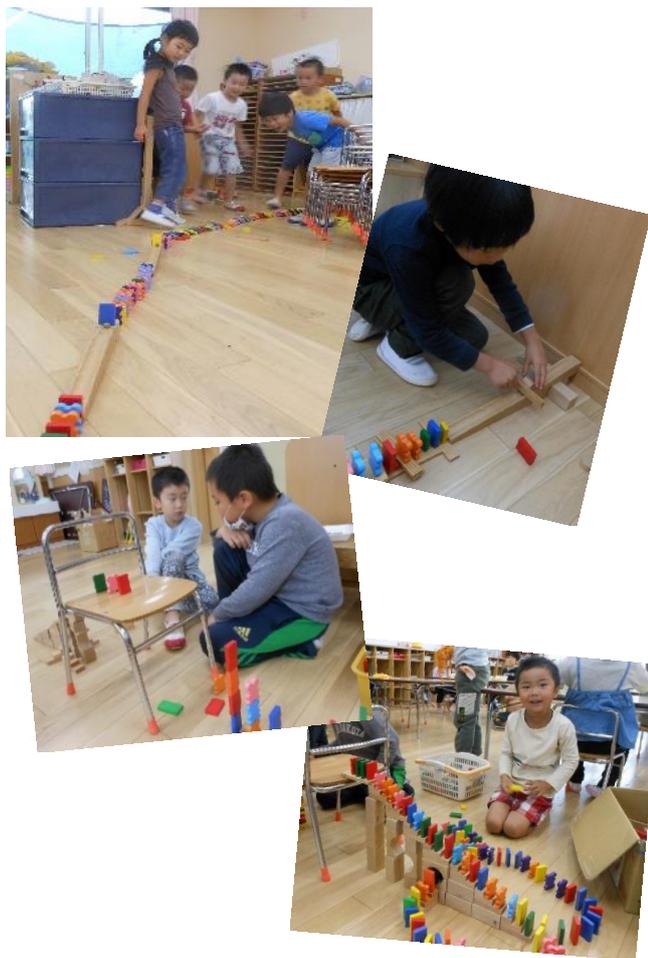
学びのポイント

「高く積みたい！」という思いをもっていたA。友だちの積み方を観察したことで、四角く積み上げると安定することやそっと置くとよいことなどに気づき、高く積むことができるようになりました。また、自分でも、両手で持って揺れないようにするなど、積み方を工夫していました。



環境構成の工夫

色々な玩具を高く積むことに関心をもっていたので、積み木も用意しました。日をまたいでも続きができるような場所を用意し、近くで遊んでいる友だちの積み木が崩れても影響が無いように広さも確保しました。また、友だちの遊び方に気づくように、それぞれの遊び場を目の届く範囲に配置したり困っている子どもに声をかけたりしました。



夏からドミノで遊び始めた子どもたち。初めはまっすぐに並べることを楽しんでいました。そのうちにドミノをカーブさせて並べてみたり、うずまき状にしてみたり、高さを変えてみたりするようになりました。

ある日、積み木の階段をのぼらせるコースをつくっていましたが、何度も失敗してうまく倒れません。やがて、『階段では小さいサイズのドミノは届きにくい』『ドミノの距離が近すぎるとうまく倒れない』ということに気がつき、場所によってドミノの置き方や、ドミノに使う素材を変えることを考え始めました。途中で玉を転がすようにするなど、新しいアイデアもどんどん浮かんでいきます。長いコースが作れるようになると途中で倒れることも多くなり、悔しい思いを何度も味わいました。友だちが一瞬懸命に並べているのを見て、ドミノを崩さないように気をつける子どもも増えました。

11月になり、クラス全員でドミノのコースをつくってみることにしました。普段からよく遊んでいる子どもが中心となり、コース設定をし、途中で倒れてしまった時にはどうすればいいかを教え合いながら、1つの道を完成させることができました。

💡 学びのポイント

失敗を繰り返す中で、その原因を解明しどうすればうまく倒れるのかを考え、試行錯誤していました。ドミノ以外にもコースの状況に合わせて様々な積み木や廃材などを使いながら、色々な道を考えてり試したりしました。思うようなコースができると楽しさが増し、さらに意欲が高まりました。

👍 環境構成の工夫

ドミノの数をたくさん用意し、いつでも試せるようにしました。また、様々な積み木やかまぼこ板なども近くにさりげなく用意しておきました。保育者も一緒に遊ぶ中で、並べ方のヒントになるようなことをつぶやいてみたことが子どもたちからどんどんアイデアが出るきっかけになり、色々なコースがうまれました。



自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にす気持ちをもって関わるようになる。



0歳児

アリ、捕まえられるようになったよ！

令和2年11月25日



ある日、散歩中に植え込みの前にしゃがみこんでアリを見つけたA・B。

「おった！」と指差ししながら教えてくれるA。アリをじっと目で追いかけて見つめているB。「アリさん、いたね！」と保育者が共感して、アリを捕まえて見せると、「おお！」と喜んで目で追っていました。

後日、公園で遊んでいると「おった！」と再びアリを見つけます。捕まえようと目で追い、指で追うA。Bはまだアリが怖くて、捕まえようとするAの姿を見守っています。

その1か月後、公園で遊んでいると「アリ！」と指差して知らせるB。その姿を見て、Aもやってきて、一緒に捕まえようとします。今回はBも積極的に指を出しています。しばらく目で追いついてやっとのことで捕まえることができました。2人で目を合わせて、とっても嬉しそうにニコリ笑っています。



学びのポイント

初めは動きまわるアリを見つけ興味をもって目で追っただけでしたが、徐々に保育者のやり方を模倣して捕まえてみようとするようになりました。公園に行くたびにアリを見つける姿から、興味・関心が持続していることがうかがえます。捕まえたことで、アリがA・Bにとってより身近な存在になりました。



環境構成の工夫

日頃から虫とかかわる機会をつくったり、身近に感じられるように虫が出てくる絵本を用意したりしています。子どもが発見した時に間近で見せたり、「アリさん、いたね！」など共感したりすることで、安心して探索する姿につながりました。



5月にトマトの苗を植え、子どもたちと一緒に毎日欠かさず水やりをしてきました。

ある日、水やりをしながら枝にたくさんの実がついていることに気づいたAは、その実を引っ張ってしまいました。保育者はトマトがどうなっているのか気になったのだろうと気持ちに共感しながら、「まだまだ青いから、赤くなったら採ろうね」と声をかけ、Aの様子を見守っていました。それを見ていた周りの子どもたちも、青いトマトをAと一緒に興味津々に見つめます。Aはギュッと握って、柔らかさを確認したりトマトを頬に寄せ感触を味わったりして、トマトがどんな物なのかを確認しているようでした。そして、枝についているトマトと手に持っているトマトを見比べて、「あっ！いっちょ！！」と指差し、にっこりと微笑みました。

周りには、「ぼくもさわりたい！」「わたしにもみせて！」とたくさんの子どもたちが集まり、一緒に感触を楽しみ始めました。これをきっかけに、次の日から数人の子どもたちがプランターの前に集まり、トマトがどうなっているのかを観察するようになりました。



学びのポイント

トマトの実がたくさんついていることに気づいたA。手に取り、実際に手や頬で感触を味わっていました。また、手に持っているトマトと枝にたくさん実っているトマトを見比べ、形が似ているのでどれも同じものだということにも気づいていたようです。トマトを実際に触ったことがきっかけとなり、さらに興味が深まり「もっと見てみたい」という気持ちにつながりました。



環境構成の工夫

栽培物に興味をもつように保育室前の乳児園庭で栽培し、ジョウロをつくっていつでも世話ができるようにしました。また、収穫したトマトを持ち帰ったり、ポートフォリオを掲示して様子を知らせたり、連絡ノートに子どもたちの様子や気持ちを記したりと、様々なツールを用いて保護者へ栽培活動の様子を知らせたことで、親子でトマトの生長を楽しむことができました。



春はダンゴムシ探し。保育者や年長児の真似をして、いそうな場所を探したり、ダンゴムシをもらって、触ったりしました。保育室では、ダンゴムシ・テントウムシ・カタツムリ・カブトムシの幼虫などを、いつでも観たり触れたりできるように、飼育しました。時には、ダンゴムシを触りすぎたり、丸めようとして「動かへん」ようになってしまったこともありましたが、徐々にそれぞれの感触の違いや扱う時の力の入れ具合などが分かってきました。

夏は毎日カブトムシ。「カブトムシ見せて」「これがおとうさん」「こっちはおかあさん」と言いながら、指先で触ったり、つのを持ったりできるようになってきました。「つのを持つとお顔がとれちゃうよ」と話し、保育者が胴体を持って見せると、胴体をつかめるようになりました。机にしがみついたカブトムシを「おとうさん強い!」と言って持ち上げようとしています。

カブトムシの観察では、土の中に卵があるのを発見したり、幼虫が大きくなる様子に気づいて、「また大きくなって」と感動を伝えたりしていました。幼虫が土に潜るときに、おしりからウンチが出てくるのを見たAは、「うんちしてる。ここがおしりや」と、発見したことを大きな声で保育者に伝えていました。土に潜る時に排泄することが分かり、その様子を観察するようになりました。



学びのポイント

身近な生き物に触れることを通して、自分たちと同じように生きて生活していることを実感しているようです。「命」や「死」については、まだまだ理解が難しい年齢ではありますが、自分と同じと感じることから、小さな生き物を愛おしむ気持ちが育まれていきます。



環境構成の工夫

保育者も一緒に観察しながら、子どもたちが何に興味をもち何を発見したのかを把握するように心がけました。死んでしまうこともありましたが、保育者が一緒に悲しんだり、「もう一緒に遊べなくなった」と話したりして、触り方を工夫できるようにしました。保育室で飼育し、保育者が世話する様子を見たり、実際に触れたりする機会をたくさんもつようにしました。



6月にアオムシの飼育を経験していた子どもたち。9月にもテラスの金柑の葉にたくさんのアオムシを見つけ、飼うことにしました。

アオムシはツンツンするとツノを出して異臭を放ちます。子どもたちは、驚きでいっばいの表情を浮かべて見ていました。

ケースのふたを開けたまま飼育しておく、アオムシが長い長い旅に出始めました。「どこにいくんやろな」三人が腰をかがめながら、小声でつぶやきます。決してアオムシの旅の邪魔をせず、一定の距離を保ち、そーっと後ろから見守ります。アオムシは、時間をかけてピアノの脚に止まったり、また動きだしたりし、子どもたちはその様子をじーっと見続けています。

次の日、壁に立てかけていたシートの側面でサナギに変態しているのを発見しました。「こんなとこに（サナギになる場所を）決めたんやな」「さわったらあかんで」「・・・」「いつ、チョウになるんやろ？」などつぶやきながら、じっと見つめていました。

💡 学びのポイント

アオムシは、サナギになりやすい場所を探し求めることを知りました。小声で後ろからついて行ったり、「さわったらあかんで」と言葉をかけ合いながらじっと見つめたりする様子から、自分より小さな生きものの動きを見守る思いやりの気持ちや、チョウになるまで大切に守ってあげようとする気持ちが伺えました。

👍 環境構成の工夫

6月はケースの中で飼育してチョウになるまで見届けました。今回はケースのふたを開け、どこでサナギになっても子どもたちと育てようという心構えでアオムシを育てることにしました。やっと見つけた場所でサナギになっているアオムシを温かい眼差しで見つめます。触ったら落ちて死ぬかもしれない命を守ろうとする気持ちも感じられました。



中学校の校長先生から木をもらったことをきっかけにテラスで木のおうちづくりが始まりました。木をもらうときには、「長いやつにする!」「僕は太いやつにする! いろんなかたちあるな!」と様々な形や太さがある中から、自分のお気に入りを見つけて喜んでいました。「木にトゲあるから気をつけような。」と、扱いに気をつけながら、作り始めました。

A「木は堅いから柱にしよう。」 B「壁はお芋のつるにしよう! くねくねしてて柔らかいな〜。つけたらカーテンみたいになった!」 C「お花の茎はすぐ折れるからくりにくいな。」 B「じゃあお花は飾りにしたらいいんじゃない?」 C「そうするわ! いろんな色のお花を飾ったら可愛くなりそうやな!」と、植物の特徴や違いを感じてどこに使うか考え、お花も大切に飾っていました。

おうちが完成して遊んでいる時にも、Aは「葉っぱが枯れてきて色が茶色になってる!」ということに気づきました。また、Bは「隙間が増えてる! ちっちゃい窓がいっぱい!」と、茎が乾燥して細くなり茎と茎の間に隙間ができたことに気づきました。植物の変化を感じながら、手づくりのおうちで遊ぶことを楽しみました。



学びのポイント

様々な自然物に触れたり使ったり遊んだりすることを楽しんでいます。遊びながら植物によって特徴に違いがあることに気づき、柱は木、壁はつるでつくるなど、植物の特徴をうまく生かしながらおうちづくりを進めていました。また、つくった後も植物の色の変化や葉が枯れていく様子などを感じ取ることができました。自然物にも命があることを理解し、大切に扱おうとしていました。



環境構成の工夫

危険のないように木の取り扱いについてルールを決め、見守ったり声をかけたりしました。また、植物を種類ごと置き、使いたいものをすぐに使えるようにしました。色々な植物に親しめるように、廊下や保育室には季節のものを置き変化に気づくように声をかけたり、図鑑などを用意して自分たちで調べられるようにしたりしました。



数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。





Aは、ころころボール落としにボールを落とし
て楽しんでいました。ボールの次には、カップを
落としてみようと思って来ました。カップが穴を
通ると、また、違うカップを拾ってきました。し
かし、穴に入りません。

どうするのかと見守っていると、角度を変えたり、
ひっくり返したりしながら、じっくりとかかわ
っています。

さらに、違うカップを持って来ますが、これも
大きくて通りません。色々な大きさのカップで試
しているうちに、1つ、通る大きさのカップを見
つけました。

しかし、通ったものの落ちずに詰まってしまいました。Aは、手で触ったり叩いてみたりしていま
す。そして、穴に手を差し入れ押しとカップが落ちました。

ここで初めて近くにいる保育者に笑顔を見せ、喜んでいました。その後は、色々な穴にカップを入
れて何度も繰り返し楽しんでいました。

💡 学びのポイント

ボール以外のものでもやってみようという興味が芽生え、カップをもってきました。自分でやってみ
たり触ってみたりして、じっくりとかかわって遊んでいます。カップが通った喜びを、保育者に受け
とめられ、安心した雰囲気の中で次のカップを通すことを楽しんでいました。様々な素材にかかわり
ながら、やがて、形や大きさの違いに気づき遊びに取り入れるようになります。

👍 環境構成の工夫

ボールだけではなくいつも遊んでいる大きさの違うカップを身近に置いておきました。そして、じっ
くりとかかわる時間も保障しました。保育者は、遊んでいる子どもの姿を見守りながら、Aの「見て
た？」という笑顔に共感し、安心して遊びを楽しめるようにしました。



Aは、保育者が野菜スタンプをして見せると「おお～！」と興味津々。やる気に満ち溢れた表情をしていました。

席に着くと、すぐに野菜と絵の具を選ぶA “にんじん” を手に取ると、喜んで絵の具をつけます。ペタッペタッと1つずつ丁寧に力強くスタンプングしています。できてきた作品を見て、Aが「まるっ～！！」と言いました。にんじんの断面で押した跡が丸い形であることに気づいたようです。隣で遊んでいたBも、にんじんスタンプの形に気づき、「まる！」と共感していました。

次に“オクラ”でスタンプをしました。引き続き、集中してスタンプを押すA。やがて、「♪キラキラひ～か～る～ お空の星よ～」と歌い出しました。オクラの断面で押したスタンプの形が星形と似ていると感じたようでした。普段から保育者のエプロンや型はめの玩具の星の形に興味を示していたAなので、すぐに形にピンときたようです。



学びのポイント

普段から、「型はめ」などの玩具で○・△・□・☆という型に親しんできました。野菜の断面のやや曖昧な形についても○型や☆型として捉え、言葉にして伝えあっています。日常生活の中で様々な形に触れたり、「～に似ている」と関連づけたりしながら形を捉えていきます。



環境構成の工夫

日常的に形に触れられるような玩具や絵本を置いています。また、身近な物に図形が描かれている時には、保育者が声をかけるなどして図形に親しみや興味をもてるようにしています。形に親しんでいる様子から野菜スタンプ遊びを用意しましたが、野菜の断面の形が知っている形であることに驚いていました。

2歳児 手、みどりになった！

令和2年8月～9月



窓際で陽の光と影を眺めるAとB。立ったり座ったりして影を不思議そうに見ていました。黒くなった部分（影）を見て、「あっ、あっ」と言いながら指を差します。

そこにままごとのジュースを持ったCがやって来ました。日なたにジュースを置くと、影が緑色になりました。「みどりになった！」驚いた子どもたちは、色々な色のジュースを並べ、床にジュースと同じ色の光が映る様子を楽しんでいました。

数日後、昼寝中に光が差し込んできたので丸や四角の形に切ったカラーセロハンを窓に貼っておきました。昼寝から目覚めた子どもが、床に映る光の色に気づき、光に手をかざして「手、みどりになった！」と驚いていました。

次の日、様々な形に切ったステンドシールで窓に家や電車の形を貼っておきました。陽の光が差し込むと形がそのまま床に映ります。「しゃっ！（でんしゃ）」と指差すと、自分たちでも真似たり形を組み合わせて色々なものをつくり始めました。ステンドシールの色や形や大きさなどを増やすとそれを使って、「せんせいみて、かお！」「こっちはロケット」などつくったものを保育者に伝え、喜んでいました。



学びのポイント

陽の光が差し込んだところに立つと黒く影になったり、ジュースの色が床や手に映ったりすることに気づき、見て楽しんでいました。影のできる仕組みを利用し、丸や三角、四角などの様々な形のステンドシールを使って影を構成し、車やチョウなど身近にあるものをつくることを楽しみました。



環境構成の工夫

偶然みつけた自分の影をきっかけに、色水ジュースの影には色がつくことを発見しました。そこで、保育者は意図的に色や形・大きさなどの異なる様々な種類のステンドシールを用意し、子どもたちが自分で自由に形をつくれるようにしました。構成したものの影が同じ形や同じ色になることが楽しく、色々な組み合わせを楽しんでいました。

3歳児

みてみて～！ここにもあったよ～！！

令和2年11月9日



Aは新しい靴を履いて来たことを朝から保育者に嬉しそうに話していました。その靴を履いて園庭へでかけます。

嬉しくて何度も靴を見ていたAは、自分の靴の色とフラフープが同じ色であることに気づき、「みてみて～」と保育者に見せにきました。そのやりとりを見ていたBも、自分の着ている服の黄色と滑り台の一部の色が同じであることに気づき、保育者に伝えにきました。保育者が他の所にも同じ黄色があることを伝えると、AもBも園庭内を探し回り、たくさん見つけていました。

Bは、固定遊具の屋根が黄色だと気づいた時に、「屋根がさんかくだー！！」と形にも気づきました。B「僕のお家の屋根さんかくじゃない…。」 A「私のお家はさんかくだよ～！」 B「あっ！こども園の屋根はさんかくじゃない」「僕のお家と同じだよー！」

今度は、形に興味をもったようでした。



学びのポイント

自分の新しい靴と同じ色が身近にあることに気づき、好奇心が刺激されたようでした。周りへ広く目を向けるようになったことで色だけでなく形にも着目するようになりました。建物や遊具など身近な建造物の色や形の違いに興味をもち、友だちと一緒に探しました。



環境構成の工夫

たくさんの発見できるように十分な時間を確保しました。子どもの気づきや発見に共感したことで、興味が広がっていきました。“探す”ことにより視野が広がり、身近なものだけでなくより大きなものの構造についても興味をもつようになりました。



A「セミの抜け殻や！」近隣の中学校にセミ捕りに行き、抜け殻を発見しました。B「ホンマや見せて！」 C「こっちもあるで！」 見回すと木の葉にたくさんぶら下がっています。AとBは、セミの抜け殻を集めだしました。A「いっぱいやな！」 Tシャツにくっつけたり、くっつくものを探したりしながら遊んでいました。

翌日…。B「見て！いっぱい見つけてん！」と、家の近くで探したたくさんのセミの抜け殻を持ってきました。 A「何個あるんやろ？」 C「数えようや。」と、一斉にあちこちで数え始めたので、何個あったか分かりません。 保育者「どうしたら数えやすいかな？」 B「並べていく？」 A「うん！」あちこちで並べはじめましたが、やっぱり数えられません。

保育者「あ、先生10個になったよ。」 B「1, 2, 3, 4・・・。これで10個や！」 周りの友だちも自分の手元に10個ずつ取り出します。C「10になった！」 10個のまとまりが7つできました。B「全部で70個や！」 1本の毛糸に10個ずつ引っ掛け、紐のれんになりました。



学びのポイント

「何個あるんだろう？」と数に興味をもち、どのように数えるとよいか考えだしました。今までは「いっぱい」と捉えていたものが、「数えたい」という思いから「具体的な」数になりました。10個のまとまりごとに毛糸にひっかけて視覚化したことで数えやすくなり、大きな数への興味の1歩となりました。



環境構成の工夫

園内に虫が少ないので近隣の中学校へ虫取りに行ったことでセミの抜け殻を発見することができました。集めたたくさんの抜け殻を広げて置いたことで「何個あるんだろう？」という興味へつながりました。『10個ずつ取る』という方法を示したことで数えやすくなり、10の単位をそのまま飾りに活用しました。



毎朝セミの抜け殻を拾ってこども園に持ってくるA。そこで、どこで拾ったか、何個拾ったか、朝の会でみんなに知らせる時間を設けました。クラスの子もたちも刺激を受け、登園時や園庭でセミの抜け殻を拾っては発表し、クラスにはセミの抜け殻がたくさん集まりました。

やがて、セミの抜け殻を以前に知ったオス・メスに分ける遊びが始まりました。B「おしりのところに線があるのがメスで、なにもないのがオスやねんで」 子ども「そうなんや！」 「あ、ほんまやこっちには線ある、メスや！」初めは皿にオス、メスを分けて入れていましたが、保育者が10ずつ数えられるようにマス目に数字を書いた表『セミの抜け殻マンション』を用意していると、Cが「1って書けるで！」と伝え、自分たちでマンションをつくり始めました。

「今日はメスが65個、オスが62個でメスの方が3個多いな！」 セミの抜け殻を表にくっつけて数えることで、どちらがいくつ多いかが視覚的に分かるようになりました。『セミの抜け殻マンション』が埋まっていくたびに、「いっぱいになってきたな～」と喜んでいます。



学びのポイント

『セミの抜け殻マンション』を用いて10ずつ数えられるようにしたことで、たくさんという漠然とした数のイメージが具体的な数字と結びつきました。また、オスとメスの数を比べて、どちらが「0個多いね」と比較して、その差を感じることもできました。友だちと一緒に数え伝え合っていました。



環境構成の工夫

たくさん集めたいという思いに応え、近所の公園に行ってセミの抜け殻集めをしました。『セミの抜け殻マンション』をつくりマス目に数字を表示したことで、「数」とセミの抜け殻を対応させ、全部でいくつと数に置き換えることができました。視覚化したことで数への興味を深めるとともに、“多さ”を数字と感覚の双方から捉えることができました。



言葉による伝え合い

保育教諭等や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。



0歳児 もう一回、読んで

令和2年10月2日



つかまり立ちや一人歩きができるようになった子どもが増え、室内でも探索活動が盛んになってきました。

Aは、柵に捕まりながら自分の欲しい絵本に手を伸ばしますが、自分ではなかなか届きません。すると、「あっ！あっ！」と保育者に自分の思いを伝えます。その様子に気づいた保育者が「取ってほしかったんやね、どうぞ」と絵本を渡すと、嬉しそうに微笑み絵本をめくって見始めました。

後日、再びその場にAの姿があります。今回は、絵本に手を伸ばすと、自分で取ることができました。その様子を見ていた保育者は「今日は自分で取れたんだね、すごいね」と声をかけました。するとAは、絵本を保育者の所へ持ってきて見つめます。「読んでほしいの？」と聞いても見つめたままです。「読んでちょうだい？」と保育者が言うと、手を重ねて「ちょうだい」のポーズをしました。

「読んでほしかったんやね」と、Aの思いを受けとめながら絵本を読みました。読み終わって「おしまい」と言うと、人差し指を立てて保育者に見せます。「もう一回？」ときくと、再び人差し指を立てて応えました。「もう一回読もうね」と、また絵本を読みました。



学びのポイント

探索活動が盛んになり、絵本を収納から自分で取って見たいと考えたようです。上手いかわないことを喃語や身振りで伝えようとしていました。保育者が気づいて、自分の思いを受けとめてくれたことが嬉しかったようです。こうしたやり取りが、『言葉による伝え合い』の第一歩です。



環境構成の工夫

見たいという意欲が芽生えるように、座っても立っても絵本が取れる位置に収納を設置しました。また、日頃から保育者が子どもの気持ちを代弁したり、「ちょうだい」「もう一回」などの言葉に合わせて動作をしながら言葉と動作が同じ意味であることを知らせたりしてきました。子どもたちは、保育者を模倣して動作で自分の気持ちを伝えようとします。



子どもたちがままごとコーナーで遊んでいます。保育者が「先生にもご飯くださーい」と机の前に座りました。すると、しばらくしてAが「はい、どーぞ！」とお皿に食べ物を入れて持ってきて、机の上に置きました。そのまま台所に戻り、次は食器入れからコップを取り出して来ました。そのコップにジュースを注ぐ仕草をし、飲み物も一緒に並べます。家や園などの食事の場面を真似して遊んでいるようです。保育者が「おいしいよー」と言うと、嬉しそうにニコっと笑い、また別の食べ物を持ってきて繰り返し遊んでいました。

また、ままごとコーナーに入る時には「ピンポーン」とインターフォンを押す真似をし、保育者が「どうぞ」と答えるのを待っています。その様子を見ていたBも、「ピンポーン」と言って中に入ったり、友だちが「ピンポーン」と言っているのを聞いて「どーぞ」と言ったりして、やり取りを楽しんでいました。



学びのポイント

家や園での食事の場面を真似し、その場面に適した言葉を用いて遊びを楽しんでいました。子どもたちは、身近な人や生活の場面を模倣しながら、簡単な言葉で保育者や友だちとやり取りすることを乐しみます。そのような経験を繰り返しながら、必要な言葉を獲得していきます。



環境構成の工夫

子どもの姿に合わせてままごとに必要な玩具を用意したり、コーナーを仕切って家のようにしたりして、子ども同士がメージを膨らませながら遊びを楽しめるようにしました。また、保育者も一緒に遊びながら、「いただきます」「ごちそうさま」「おいしい」などと言葉で伝え、やり取りをしながら楽しめるような雰囲気をつくりました。

2歳児 貸して あとでね

令和2年9月16日



コンビカーに乗って園庭を散歩していた A。そこへ、B がやってきました。B「車貸して」 A「あとでね」 B「貸して」 A「あとで」 繰り返しやりとりをしています。

A「今使っているから、あとで貸したる」 今度は、自分の気持ちが伝わるように表現を工夫しましたが、B「これ貸してって言うてるやん」と言って泣き始めました。その姿を見た A は、じっと黙って B の表情を見て、何かを考えている様子でした。

そのうちに B はコンビカーを手にとって、A から離れようとしてきました。A「これ A ちゃんが使ってた。まだいいよって言うてない。持っていかんといて」 B は A の言葉を聞き立ち止まりました。

その後、保育者の仲立ちによって、A は友だちの話を聞き相手の思いに触れました。A は「貸したる」「どうぞ」と、B にコンビカーを渡しました。B は何か考えている様子でしたが、しばらくして A のもとに向かい、コンビカーと一緒に押して遊び始めました。



学びのポイント

A は、「あとでね」と自分の思いを言葉で伝えますが、なかなか相手に理解してもらえずもどかしい思いをしました。伝え方を工夫しますが、相手は分かってくれません。保育者の仲介により友だちの思いに気づき、今度は相手の立場になって考えようとしています。

👍 環境構成の工夫

友だちとかかわる時には、自分の思いを言葉で伝えてもいつも受け入れてもらえるとは限りません。相手に自分の思いを分かってもらいたいという子どもなりの表現を保育者が受けとめながら、友だちにも思いがあることが感じられるように伝え合いました。



人形を服の中に忍ばせて「おなかにあかちゃんがいるの」と、妊娠しているお母さんになって遊んでいます。保育者が「大丈夫ですか？もうすぐ生まれそうですね。先生、先生お願いします」と近くにいる子どもに話しかけると、服の下から出産シーンのように赤ちゃんを取り出し、医者になって遊び始めました。

「あいたたた～」と保育者も妊婦になって遊び始めると、子どもたちが集まり出し、妊婦になった保育者が次に何を言い出すか、薄笑いしながら注視します。「がんばって～」「もうすぐですよ」と出産さながらの声をかける子どももいます。

子どもたちも代わる代わるベッドに寝転んだり、お医者さん役になったりして、病院ごっこが続ききました。A「次の方、どうぞ」と大きな声で案内し、「どうされましたか？」と具合を伺います。B「ちょっとお腹が苦しいんです」 A「そうですか」 C「こっちにお薬ありますよ」 Aは薬を受け取り、「はいどうぞ」と飲ませる仕草をします。Bはゴクゴクと飲む真似をし、B「あっ、よくなりました。ありがとうございました」と帰って行きます。

「次の方どうぞ」と、繰り返し楽しい遊びが続きます。



学びのポイント

保育者と一緒に遊びながら病院ごっこのイメージを共有し、保育者の言葉に反応して、その状況に応じた言葉を使おうとしていました。保育者を介しての伝え合いでしたが、遊びの楽しさが継続することで、子ども同士でもやりとりが見られるようになっていきました。友だちに言葉をかけ、返ってきた言葉に応じて再び言葉を返すという、言葉のやりとりの楽しさを感じながら遊んでいました。



環境構成の工夫

保育者が子どもたちの遊ぶ姿を見取り一緒にやりきって遊ぶことを大切にすることで、保育者を拠点にして友だち同士がつながり、次第に子ども同士でやりとりして遊ぶ姿に発展しました。やりきって遊べるように、ベッド・聴診器・薬・カルテ用のメモ・ペンなどを手の届くところに準備し、いつでも遊び始められるようにしておきました。



5歳児からカブトムシの幼虫をもらいました。日頃から様々な生き物に触れてきた子どもたち。土の中に潜っている幼虫を「見たい」と興味津々です。

保育者「大きい部屋に移し替えてあげようか？」 A「そうしよう」 幼虫が見えると、B「うわ、幼虫や！気持ちわるっ」 C「ぼく触られへんねん」と言いながら、友だちが触っている様子を見ておそろおそろ小さいのを触ってみます。

B「ふわふわや〜」 C「先生、ぼく触れたで！」と初めて触った感触を表現し、嬉しさを保育者に伝えてきました。保育者「よかったね！やさしく触ってあげてね。」 B「分かった」 C「気をつけて触るわな」扱いがやや雑な部分がありますが、子どもたちなりに気をつけて触っています。

D「ぼくも見せて」 B・C「いいよー」 Dは触れませんが、図鑑を持って来てカブトムシの幼虫について調べています。D「これかな〜？」 B「それや！」

D「これ（頭？）がここやんな」と、図鑑と実物を何度も見比べて幼虫を観察しています。 B「これが（一番大きいのが）お父さんで、これがお母さん、これが赤ちゃん」 C「赤ちゃん元気ないな。疲れてるかしらん。」 保育者「ちょっと疲れてるんかも」 D「ちょっとなおしてあげたら？」 B「じゃあまたあとでにしよう」

幼虫の様子を自分たちの生活経験と照らし合わせ、幼虫の気持ちを考えていました。

💡 学びのポイント

「ふわふわ」という友だちの言葉で感触をイメージすることができました。また、「気をつけて触る」「疲れてるからそっとしとこ」など、幼虫に対する思いやりの気持ちを言葉にしながらい方を考えていました。幼虫を見て感じたことや図鑑と比べて気づいたことなどを言葉で伝え合う中で、友だちと楽しさや不思議さ、思いやる気持ちを共有することができました。

👍 環境構成の工夫

色々な虫や生き物を飼育し、自分たちで見たり調べたりできるように虫眼鏡や図鑑を用意しています。大きな飼育ケースで幼虫を育てることで、自由に触れて、より近くで観察できるようにしています。どんなふうに幼虫を触ってあげるとよいかなど、考えられるように言葉をかけました。



イチゴが赤くなっていることに気づいたAとBが、イチゴを一つ収穫し、イチゴジュースをつくり始めました。A「うわージャムの匂いしてきた！」 B「めっちゃ飲みたい！」 保育者「イチゴケーキ食べたくってきたな」などと会話をしながら、近くに石鹼を用意しました。すると、去年の経験からクリームづくりや泡遊びが始まりました。

AとBも「イチゴサイダーつくるわ！」と泡をつくり始め、つくった泡をイチゴジュースの中に入れて振って混ぜ、イチゴサイダーができあがりしました。できたジュースを「早くみんなに見せたい！」という思いから、その日の振り返りでクラスのみんなに知らせることにしました。以前にも、バジルや甘夏の皮などでつくったジュースの匂い比べをしたことがあったので、クラスの友だちもイチゴサイダーの匂い比べを楽しみにしています。

C「Aの方は色が濃くてジャムみたいな匂いがする！」 D「Bの方は石鹼の匂いが強い！」など、2つのイチゴジュースの匂いに違いがあったので、作り方をきくことにしました。 A「イチゴを潰してから水を入れてつくった」 B「水の中にイチゴを入れて潰してつくった」 一つのイチゴを分けてつくっただけなのに、作り方の違いにより出来上がりが違うことが分かりました。

💡 学びのポイント

去年の経験から、色水遊びや泡遊びの楽しさを知っているので、様々な素材を活用できるように準備しておきました。匂い比べをしながら、自分が感じた違いを言葉で表現し伝え合っています。順序立てて説明することができるようになったことで、手順の違いが匂いの違いにつながったことを発見しました。

👍 環境構成の工夫

おやつにでた甘夏の皮を遊びに使ったことがあり、それ以降、様々な素材でジュースづくりを楽しんでいます。イチゴと泡を組み合わせ、イメージ通りのイチゴジュースができたことで、友だちに伝えたいという気持ちになりました。子どもの気持ちを受け、振り返りの時間に伝えることにしました。



豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。





新聞紙を丸めたドーナツ型の手づくり玩具を棚に置いておくと、舐めたり触ったりしていました。そこで、保育者がハンドルのように持って“バスにのって”を歌うと、子どもたちも歌に合わせてリズムにのり、左右に体を傾けたり保育者の膝の上で揺られたりして遊びます。

ハンドルを棚に置いておくと、“『バスにのって』がしたい！”と保育者に身振りや表情で伝えたり、ハンドルを持って色々な所を歩き回ったりします。少しずつ遊び方も変わってきました。

Aは、ドーナツ型を顔の前に持ち、横から顔をのぞかせ「ばぁ！」と出てきました。保育者が「いないいない」と声をかけると「ばぁ！」と出てきて、繰り返し楽しんでいます。Bもドーナツ型を持ってきて、Aの真似を始めました。顔は見えていますが、AとBは隠れたつもりになっているようです。

Cは、ドーナツ型を腕に通し、鞆に見立てて腕を振っています。「いってらっしゃい」と声をかけると、とても嬉しそうに保育室をグルグル歩き回っていました。



学びのポイント

保育者とドーナツ型をハンドルに見立てて遊んだのをきっかけに、子どもたちも自らドーナツ型を用いて遊びを始めました。日頃から楽しんでいる“いないいないばぁ”や大人の姿を模倣した鞆など、生活やこれまでの経験が遊びに表れています。



環境構成の工夫

ドーナツ型をいつでも遊べるように棚に置いておきました。そして、子どもの表現を受けとめ保育者が共感的にかかわることを大切にしました。保育者や友だちとともに楽しみ、面白さやたっぷり遊んだ満足感を存分に味わうことが、表現する喜びにつながります。



保育者と一緒にブロックを積み重ねたりつくったりすることに少しずつ興味が出てきました。ブロックを高く積み重ねたい時には、「ん！（先生も一緒にやって!）」と声をかけてきます。

この日も一緒にブロックを積み重ねていました。保育者が「高くなってきたねー！」と話すと、クマのおもちゃを持ってきて「高いですよ〜。」「上で〜す。」と、エレベーターのように見立てて遊び始めました。

他の遊びをしていた周りの子どもたちも、興味をもって側で見っていたり、遊びに参加したりし始めました。

子どもたちはブロックが自分の背の高さより高くなっても、一生懸命に腕を伸ばし積んでいきます。どんどん積んでいましたが、とうとうバランスが崩れて倒れてしまいました。「キャー!!」と驚きながらも崩れる様子に大喜び。その後、「もう一回!」とブロックを積み重ねて、繰り返し遊ぶ姿が見られました。

💡 学びのポイント

保育者と一緒に、手指を使ってバランスをとりながら高く積むことを楽しんでいます。そして、高くなったブロックから高い所へ移動できるエレベーターを連想し、遊び始めました。友だちのしていることに興味をもった子どもたちは、自らかかわっていきます。そうして、友だちと一緒に、いつ崩れるかわからないスリルを味わいながら、繰り返し楽しんでいました。

👍 環境構成の工夫

広いスペースを確保し、子どもたちが十分に遊べる数のブロックを用意しました。また、保育者が一緒に遊んだり思いを代弁したりしながら、高く積みたいという思いが実現するように援助しました。保育者が一緒に遊ぶことで場が盛り上がり、周りで遊んでいた友だちも興味をもってかかわるようになりました。



公園に散歩に行くと枯れ葉がたくさん落ちていました。子どもたちは、枯れ葉の上を歩くと「カシャカシャ」と音が鳴ることや、風が吹くと木の枝から葉が落ちてくることを不思議に感じているようです。

Aも興味をもち、「見てー！」と落ちてくる葉を指さして保育者に知らせていました。「ほんとだ。落ちてきたね～」と保育者も一緒に見上げると嬉しそうに笑っています。

公園内の大きな木の下に黄色や赤、茶色などの葉が落ちていました。保育者が色鮮やかな葉を拾っていると、「見つけたよー！」とAも葉を手に取りました。

大事そうに手に持ち、しばらく公園内を散策していましたが、ふと、両手に持っていた葉を頭にかざし「ぴょんっ！」と言いました。保育者が「ウサギさんみたいだね～」と声をかけるとさらに周辺を「ぴょんっ！ぴょんっ！」とウサギのように飛び跳ねます。「見て～跳んでるよ～」と楽しんでいました。

Aのなりきっている姿をみて、Bも真似をして跳び始めます。さらに、「せんせい！クマー！」と自分のイメージした動物になって遊び始めました。



学びのポイント

色鮮やかな葉やどんぐり、木の枝など、身近な自然に触れる喜びや、葉の上を歩く時の音の心地よさ、葉が落ちてくる不思議さを存分に味わっていました。たくさんの葉の中から選んだ大切な2枚の葉からウサギの耳をイメージし、「ぴょん、ぴょん」と飛び跳ねる様子を表現しています。友だちもその姿を見て“楽しそうだなあ”“やってみたいなあ”と刺激を受けたようです。



環境構成の工夫

秋には豊かな自然を存分に味わえるように散歩に出かける機会を増やしています。色や音、感触など五感を通して感じることができるよう声をかけています。また、子どもが発する言葉をよく聞き、感じたことに共感し、一緒に遊びながらイメージが広がる言葉かけを大切にしています。



Aが家からカップを持って来たことをきっかけに、ドングリマラカスづくりが始まりました。ドングリを入れすぎると音が鳴らないので数を減らしたり、テープを何重にも巻いて取れないようにしたり、「かっこいいから黒塗るねん」とマジックで色を塗ったりしながら、それぞれがオリジナルのマラカスをつくっています。

すると、「〇〇ちゃん（のマラカス）と音が違う！」「かわいい音してるね」と音の違いに気づいて鳴らし始めました。音楽をかけると、積み木で音を出したりポンポンを持って踊り出したりする子どももいます。「先生はピアノ弾こうかな」と弾く真似をすると、Aも積み木でピアノをつくって弾き始めました。近くに空き箱をいくつか置いておくと、周りの子どもたちもピアノや太鼓に見立てて遊び始めます。B「Cと一緒に太鼓するねん」と1つの太鼓を一緒に叩きます。

「次は、〇〇（の曲）かけてー」「もう一回！」と、好きな音楽に合わせて友だちと一緒に音を鳴らしたり、踊ったりすることを楽しんでいました。絵本を見て「次これ（ギターのようなもの）つくりたい」と新しい楽器もつくり始めました。



学びのポイント

思い思いのマラカスをつくること楽しんでいました。友だちと一緒につくることで、素材やドングリの量や大きさにより音が異なることに気づきました。音楽に合わせて自分でつくった楽器で音を鳴らしたり体を動かしたりしながら、保育者や友だちと顔を見合わせ、笑顔で楽しさを共有していました。



環境構成の工夫

興味をもった子どもがすぐにつくることができるように空き容器をたくさん準備しておきました。また、遊びの様子を見ながら、絵本を置いたり声をかけたりして遊びが発展していくきっかけになるように援助しました。一緒につくって遊んだり一人ひとりの表現している姿を認めたりして、楽しんで遊ぶことができるようにしました。



虫の好きなAが、画用紙でバッタをつくり始めました。しかし、なかなかイメージ通りにつくることができず、図鑑を見ながら一生懸命つくりました。つくった虫を保育者が飼育スペースに飾ると、Aは嬉しそうに見ています。同じく、虫が好きなBはAのつくった虫に気づき、一緒に眺めていました。

次の日、黒の紙粘土やモールを置いておくとBがやってきました。B「何かつくっていい？」保育者「何をつくりたいの？」B「クモをつくりたい！でもクモってどんなんやったかな？」と言いながら図鑑を開き、つくり始めました。B「顔があって、体もあるねん」「足は8本で…」イメージした物が立体となりリアルに表現できたことを喜ん

出来上がった虫を大事そうに持ち散歩に行くBの後をCがついて行きます。その手にはBのつくったクモが、、C「一緒に遊ぼう！」B「いいよ。何して遊ぶ？」C「かくれんぼしよう」と、クモを草の中や木の裏に隠し見つけるというかくれんぼが始まりました。その様子を見ていたDも遊びに加わります。何度も繰り返し楽しんでいました。



学びのポイント

Aは図鑑を見ながら好きな虫をつくり、満足のいくものに仕上げることができました。Aのつくった虫に興味をもったBが、『自分もつくってみたい』と挑戦します。黒い紙粘土とモールからクモをイメージし、図鑑を見ながら立体的でリアルなクモを完成させました。Bは、つくったクモに愛着をもち、大切に連れて歩きます。虫が好きな友だち同士がつながり一緒に遊ぶようになりました。



環境構成の工夫

飼育コーナーに子どもたちと一緒に草木をつくって飾り、いつでも調べられるように図鑑を用意しました。そこに、Aのつくった虫を飾ったことで、Bが虫づくりに興味をもちました。また、Bの心が動いたタイミングに合わせて、材料を用意しました。イメージ通りの虫が完成したことで、愛着をもち、友だちと繰り返し遊びました。

5歳児 秋色にしたい！

令和2年9月30日



クレープ屋さんづくりをしていたAとBが、秋をイメージしながら看板の色を相談したり、飾りつけを考えたりしています。散歩にでかけた時、Aはきれいに色づいた落ち葉を拾いました。A「この葉っぱ、黄色と茶色のグラデーションになってる」B「ほんまやさきれい！次はオレンジの葉っぱ探そう！」使いたい色の葉を選んで持ち帰り、早速クレープ屋さんの看板に飾ってみました。B「うわ～！一気に秋っぽくなったね」A「いい感じ！」二人は満足気でした。

看板ができると、次はできあがったものを置くところがないことに気づきました。段ボールに穴を開け、クレープを差せるようにします。A「本物のクレープ屋さんみたいに、虹色に塗ってかわいくしたい！」絵の具はパステル系の4色を選びました。B「紫色も入れたいねんけど…」A「ピンクと水色を混ぜてみよ」二人で絵具を混ぜてみます。B「すごい～薄紫になった！めっちゃきれい！！」驚きの表情を見せワクワクしていると、「私も手伝いたい！」と数人の友だちが集まってきました。協力してできた看板やクレープ立てに胸を躍らせ、嬉しそうにクレープ屋さんを開店しました。

A「秋の新メニュー考えへん？」 C「マツボックリチョコはどう？」 D「ポッキーバナナチョコパフェは？」 A「それいい！期間限定で売ろう！」と思いを巡らせながら素敵なパフェも出来上がりました。

💡 学びのポイント

自分のイメージを伝えたり友だちのアイデアを受け入れたりしながら相談し、協力してお店をつくりました。思いが通じ合う喜びや目的に向かって一緒に遊びを進めていく楽しさを味わい、季節を感じながら、秋をイメージして遊びの中にも取り入れました。

👍 環境構成の工夫

散歩に出かけたり園庭の草木に目を向けたりしながら、季節を身近に感じて過ごせるようにしています。公園で拾ったどんぐりやマツボックリなどの自然物は、子どもたちの手に取りやすい場所に置くようにしました。振り返りを活用してAとBの遊びをクラスの友だちにも知らせ、周りの子どもたちもイメージを共有しながら遊びに参加できるようにしました。

令和元年・2年度 幼児教育研究
様々な遊びの中で健やかに育つ子どもの育成をめざして

小学校へ伝えたい

豊かな環境の中で育つ “幼児期の終わりまでに育ってほしい姿”
～0歳児から5歳児までの育ちを小学校へ～

令和3年1月23日 発行 (R2-135)

【発行】八尾市

八尾市教育委員会

〒581-0003 八尾市本町一丁目 1-1

【TEL】072-991-3881 (代表)
